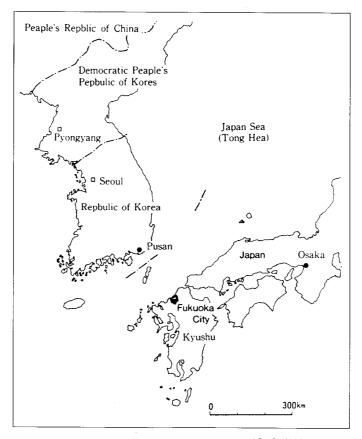
福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集

# 飯氏二塚古墳

1995 福岡市教育委員会

# 飯氏二塚古墳

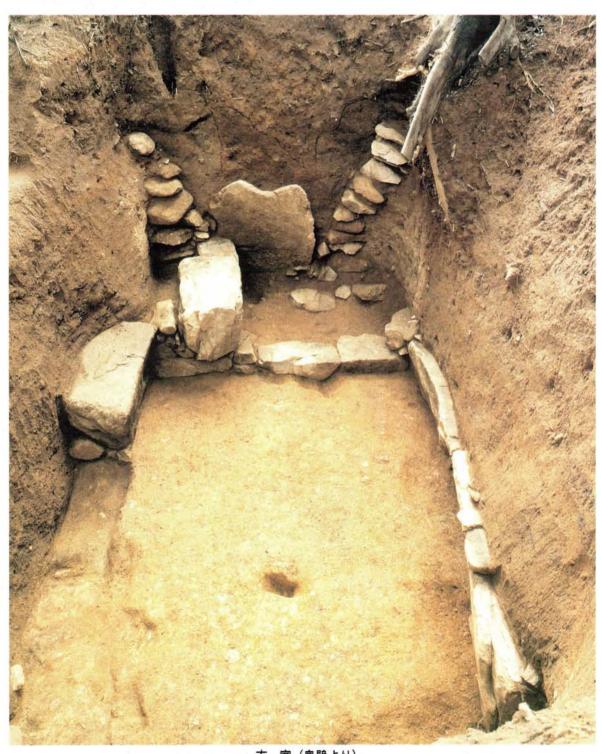


遺跡略号 I J K-1 調査番号 9258

1995年3月 福岡市教育委員会



飯氏二塚古墳遠景(東より)



玄 室 (奥壁より)

# 序 文

福岡市は古来より先達の生活の場であったようで、発掘調査によって明らかになった遺跡も年ごとに数を増してきています。

ここに掲載するのは重要遺跡の確認に伴う古墳時代の墳墓についての報告です。今回調査した飯氏二塚古墳は、これまで全長40mほどの前方後円墳として知られていましたが、墳丘の形状、石室の遺存状況、埴輪・葺石の有無については未確認でした。この度の発掘によって、古墳の構造や築造の時期葬制をしめす貴重な資料を得ることができました。くびれ部から出土した須恵器は、当時の儀礼を知るうえで注目されます。ここでは、出土遺物の復元や金属器の保存処理など、そのご明らかになった知見に、須恵器の胎土、金属器の考察などの所見を加えて報告するように努めました。分析にあたって各方面から研究成果を寄せていただき、内容の充実をはかることができました。将来この報告書が内外の文化交流に役立つことを期待します。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたりご協力いただいた関係者のみなさまに心より御礼を申し上げます。

1995年3月31日 福岡市教育委員会 教育長 尾 花 剛

# 例 言

- 1. 本書は、重要遺跡の確認に伴って発掘調査した福岡市西区大字飯氏に所在する飯氏二塚古墳第一次調査の報告書である。
- 2. 調査は、福岡市教育委員会を主体に1992・93年度に発掘調査、1994年度に整理作業を行った。
- 3. 本書に使用する方位はすべて磁北である。
- 4. 本書の執筆分担は目次と文末に記した。
- 5. 遺構の実測は、調査参加者で分担して行った。とくに地形測量は、九州大学考古学研究室の専攻生によるところが大である。
- 6. 写真撮影は、調査参加者のほか気球写真を空中写真企画に委託した。
- 7. 遺物の実測は、調査担当者のほか馬具を宮代栄一がおこなった。
- 8. 本書に使用した地図のうち(Fig1)は、国土地理院発行の5万分の1図福岡・前原を使用した。また(Fig2)は都市計画図をもとに作成した。
- 9. 出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管の予定である。
- 10.本書の編集は、常松が行った。

遺跡調査番号 9258 遺跡略号 IJK-1 分布地図番号 飯氏121

調査地地籍 福岡市西区飯氏字鏡原792-2ほか8筆

調査面積 3,500㎡ 調査期間 1993年2月7日~6月16日

# 本文目次

第1	章	調査の記録				
1.	調査	その概要		2		
2.	墳丘	この構造と遺構・遺物の配置		5		
	石室	<b>雪の構造</b>		8		
	葺石	<u> </u>		10		
	土層	<u> </u>		16		
第 2	章	出土遺物				
	須惠	 器		19		
	土製品					
	玉类	<u> </u>		23		
		氏二塚古墳出土の馬具	宮代栄一			
	飯日		三辻利一			
	鉄鉱	ķ ·····		53		
第3	3 音	結語		53		
	Si	ammarv		55		

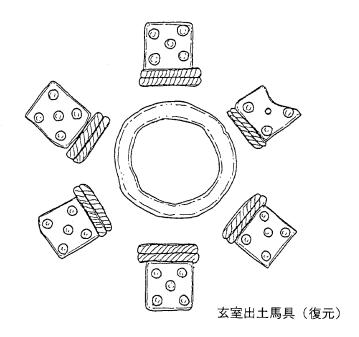
# 挿図目次

Fig.	1	主要前方後円墳の分布(縮尺1/75,000)	3
Fig.	2	飯氏二塚古墳周辺地形(縮尺1/3,000)	4
Fig.	3	飯氏二塚古墳周辺地形(縮尺1/600)	5
Fig.	4	飯氏二塚古墳現況測量図(縮尺1/300)	6
Fig.	5	飯氏二塚古墳トレンチ設定図(縮尺1/300)	7
Fig.	6	飯氏二塚古墳石室実測図(縮尺1/60)	9
Fig.	7	第1号トレンチ葺石検出状況(縮尺1/40)	10
Fig.	8	第2・4号トレンチ葺石検出状況(縮尺1/40)	11
Fig.	9	第6・7号トレンチ葺石検出状況(縮尺1/40)	12
Fig.	10	第9号トレンチ葺石検出状況(縮尺1/40)	13
Fig.	11	第10・11・13号トレンチ葺石検出状況(縮尺1/40)	14
Fig.	12	第14号トレンチ葺石検出状況(縮尺1/40)	15
Fig.	13	第15号トレンチ西壁土層図(縮尺 1 / 6 0)	16
Fig.	14	第12号トレンチ北壁土層図(縮尺 1 / 6 0)	17
Fig.	15	第5号トレンチ西壁土層図(縮尺1/60)	18
Fig.	16	飯氏二塚古墳出土須恵器(1)(縮尺1/3)	20
Fig.	17	飯氏二塚古墳出土須恵器(2)(縮尺1/3)	21
Fig.	18	飯氏二塚古墳出土須恵器(3)(縮尺1/6)	22
Fig.	19	飯氏二塚古墳出土の土製品(縮尺1/2)	23
Fig.	20	飯氏二塚古墳出土の玉類(原寸大)	24
Fig.	21	飯氏二塚古墳(縮尺1/2)	40
Fig.	22	1. 羽根戸E3号墳、2. 羽根戸E8号墳(縮尺1/2) ····································	41
Fig.	23	1~9. 羽根戸E11号墳、10·11·12.夫婦塚1号墳(縮尺1/2) ·················	42
Fig.	24	1·2.羽根戸N8号墳、3.大牟田1号墳、	
		4・5・6.大牟田2号墳(縮尺1/2)	43
Fig.	25	1.大牟田12号墳、2・3・4・5.大牟田14号墳(縮尺1/2)	44
Fig.	26	1~4. 吉武塚原L-2号墳、5. L 群出土古墳不明	
		6~9. 吉武塚原L-4号墳、10. 吉武塚原L-1号墳(縮尺1/2) ···············	45
Fig.	27	柏原A2号墳(縮尺1/2)	46
Fig.	28	柏原A2号墳(縮尺1/2)	47
Fig.	29	柏原A2号墳(縮尺1/2)	48
Fig.	30	鉄鏃実測図(縮尺1/2)	53
		表 目 次	
Tab.	1	飯氏二塚古墳出土のガラス玉	23
Tab.	2	飯氏二塚古墳分析値	49
Tab.	3	クエゾノ古墳群分析値	52

# 図版目次

巻頭図版 1	飯氏二塚古墳遠景(東より)
巻頭図版 2	玄室(奥壁より)
PL. 1	後円部近景(西より)
	前方部近景(西より)
PL. 2	前方部近景(東より)
	前方部近景(北東より)
PL. 3	玄室(羨道部上面より)
PL. 4	玄室(東より)
	玄室(西より)
PL. 5	閉塞石(玄室より)
	玄門部(玄室より)
PL. 6	玄室南東部隅
	玄室南西部隅
PL. 7	玄室西側壁
	南側くびれ部(第1トレンチ)の掘り下げ(南より)
PL. 8	南側くびれ部(第1トレンチ)葺石検出状況(東より)
PL. 9	南側くびれ部(第1トレンチ)葺石検出状況(南より)
	南側くびれ部(第1トレンチ)葺石近景(南より)
PL. 10	前方部北東隅(第9トレンチ)葺石検出状況(西より)
	前方部北東隅(第9トレンチ)葺石検出状況(南より)
PL. 11	前方部南西隅(第6トレンチ)葺石検出状況(東より)
	前方部南西隅(第6トレンチ)葺石検出状況(西より)
PL. 12	前方部中央部(第7トレンチ)葺石検出状況(東より)
PL. 13	北側くびれ部(第2・4トレンチ)葺石検出状況(北より)
	北側くびれ部(第2・4トレンチ)葺石検出状況(南より)
PL. 14	後円部北側(第10トレンチ)葺石検出状況(北より)
	後円部南西側(第14トレンチ)葺石検出状況(西より)
PL. 15	後円部西側(第13トレンチ)葺石検出状況(西より)
PL. 16	後円部西側(第11トレンチ)葺石検出状況(西より)
PL. 17	後円部西側(第12トレンチ)の掘り下げ(東より)
	後円部西側(第12トレンチ)出土の甕棺(西より)
PL. 18	後円部玄室奥(第15トレンチ)の土層(南より)
PL. 19	前方部南奥壁(第5トレンチ)の土層(南より)
	後円部西(第12トレンチ)の土層剥ぎ取り作業
PL. 20	南側くびれ部(第1トレンチ)襃出土状況(南より)
	南側くびれ部(第1トレンチ)有蓋式脚付壷出土状況(南より)
PL. 21	出土遺物 1
PL. 22	出土遺物 2
PL. 23	出土遺物 3
PL. 24	出土遺物 4

# 飯氏二塚古墳の調査



# 第1章 調査の記録

### 1. 調査の概要

飯氏二塚古墳は、高祖山から派生する標高35mの低丘陵上に位置する。今宿古墳群として総称されているが、むしろ糸島平野の東という表現が適切で、行政区として前原市にあたる怡土城内の前期の前方後円墳を含めた検討が必要であろう。

今回の調査の目的は、古墳の構造と時期を明らかにすることで、具体的には地形測量を行ない、トレンチを設定して遺構・遺物両面の所見を得ることである。

まず調査地の地番を確認し、所有者各位に説明したところ、調査の趣旨にご理解いただき承諾を得ることができた。

調査地の現況は雑木林でトラバース測量の障害になる木の伐開から開始した。地形測量の後、くびれ部からトレンチを開け、次いで前方部の隅や後円部にかけて拡張した。主体部付近に摺り鉢状の凹みがあり、掘削の結果、石室の一部は遺存していることがわかった。石室の清掃と土層観察のためのトレンチの掘り下げは、土量が多く難行したが無事に調査を終えることができた。期間は、地形測量を含め約4か月であった。

またこれまで子捨塚と二塚の名称が混同して用いられていたが、子捨塚は、二塚の南東にある近接 した二基の円墳をさすことを申し添えておきたい。

#### 所有者各位

川上孝愛・川上友徳・久保 肇・谷 義湊・谷口 登・津元通良・矢野義男 (五十音順敬称略)

#### 調査組織

調査主体

福岡市教育委員会

調査総括

埋蔵文化財課長 折尾 学

埋蔵文化財第一係長 飛高憲雄(前)横山邦継(現)

庶務

中山昭則(前)内野保基

調査担当

埋蔵文化財第一係 常松幹雄

調査協力

大塚紀宣・尾園 晃・岸本 圭・八丁由香・森井啓二

(九州大学文学部考古学研究室)

調査・整理参加者 有村洋一郎・池田由美・衛藤美奈子・加藤清一・小金丸ミネ子・末永 諭・

末松タツエ・末松美佐子・副田博記・曽田洋史・土谷貴志・徳安 勉・

鳥井原良治・中村昭市・波多江喜代子・原美晴・平野義雄・船越恒人・

堀本歳四郎・保田清隆・真鍋キミエ・百武義隆・吉川順岳・脇坂レイコ

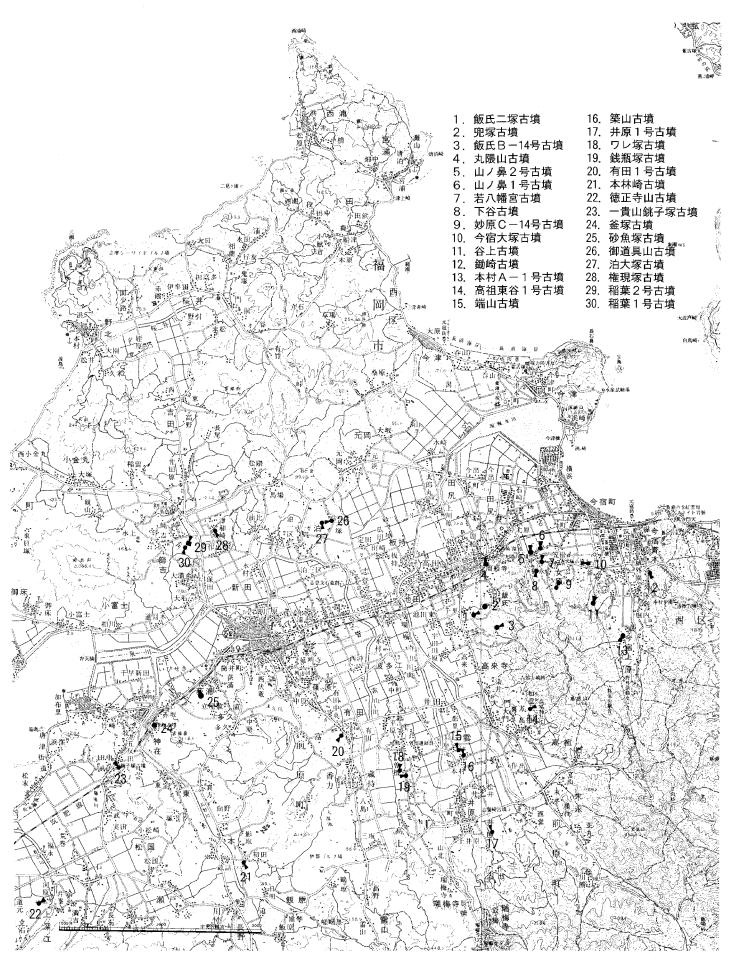


Fig. 1 主要前方後円墳の分布 1/75,000

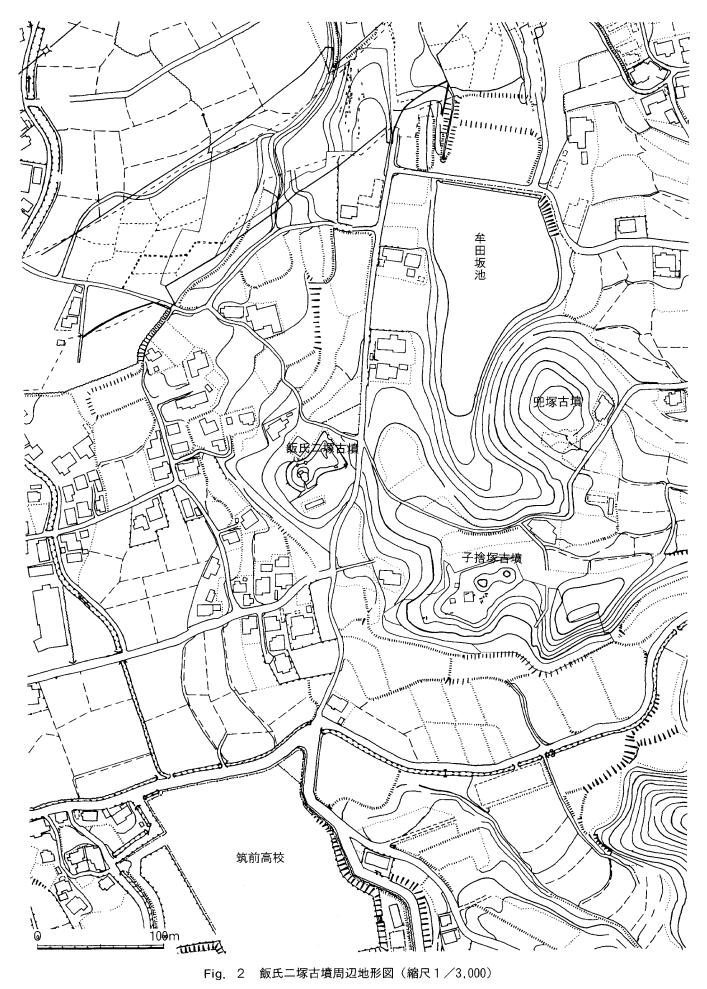
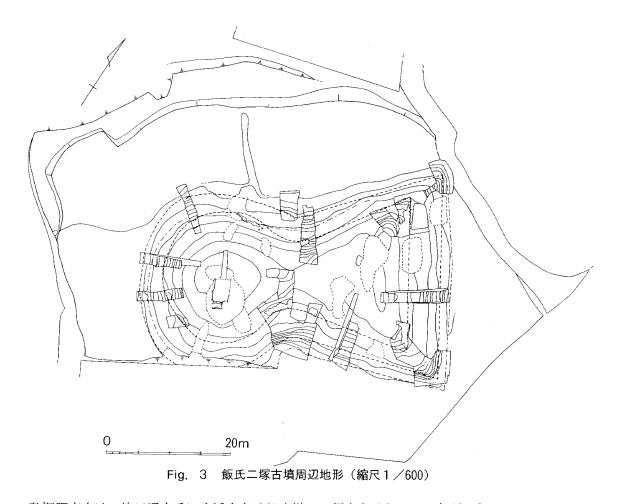


Fig. 2 飯氏二塚古墳周辺地形図(縮尺 1 / 3,000)



発掘調査中は、津元通良氏に生活水をはじめ様々の便宜をはかっていただいた。

発掘調査ならび資料整理にあたっては福岡大学の小田富士雄氏、指導委員の渡辺正気氏、日本考古 学協会員の中村 勝氏から教示を得た。記して感謝申し上げる次第である。また土層の剥ぎ取りにあ たって杉山富雄氏に尽力いただいた。

### 2. 墳丘の構造と遺構・遺物の配置

墳丘は、前方部・後円部ともに二段築成をなし、比高差はみられない。それぞれに葺石が回るが、 埴輪は確認されなかった。各部の土層観察によるとほぼ全体が盛り土である。これら盛土の中から弥 生土器や太型蛤刃石斧が採取されており、尾根筋に立地した遺構の覆土と考えられる。戦後、墳丘の 北と西側は開墾をうけている。墳丘一段目の遺存状況がよくないのは、こうした事情を反映している のだろう。防空濠や作物貯蔵用の穴も数箇所で認められた。以上の所見から、飯氏二塚古墳の規模は 次のように捉えられる。

全長 48 m程度。後円部径 23 m程度。前方部幅 33 m。現況の墳丘 5 m程度。主軸  $N-57.5^{\circ}-E$ 。

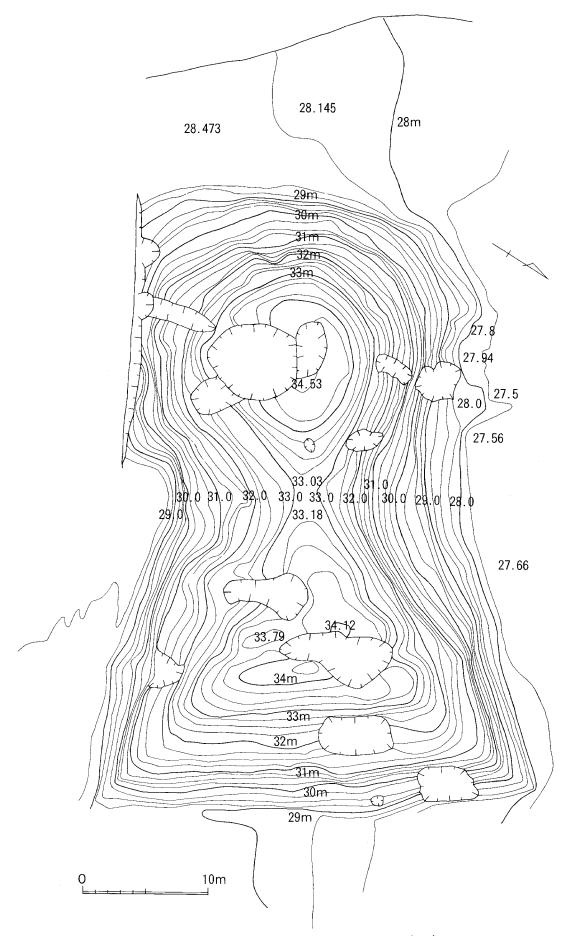


Fig. 4 飯氏二塚古墳現況測量図(縮尺 1 /300)

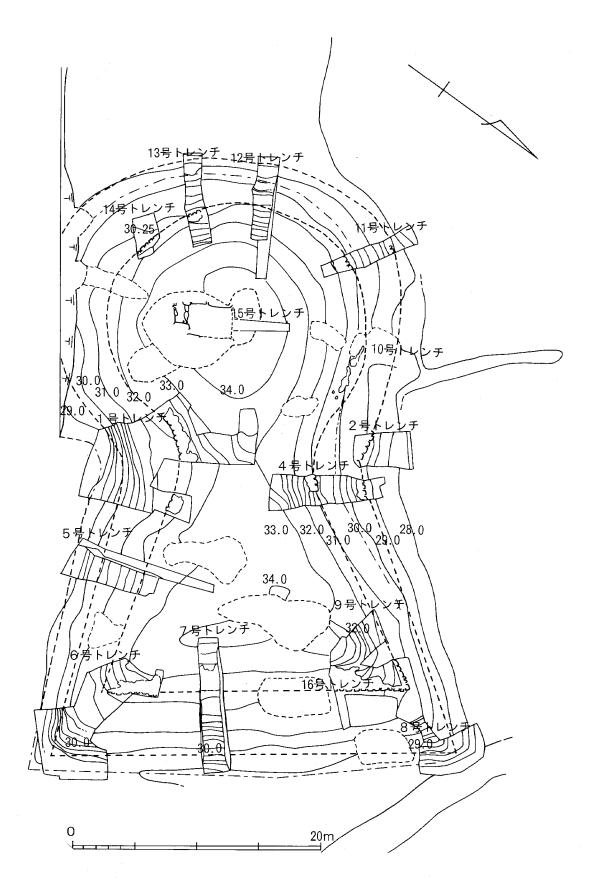


Fig. 5 飯氏二塚古墳トレンチ設定図(縮尺1/300)

#### 石室の構造

後円部の中央、主軸に直交する石室を確認した。花崗岩を用いた単室構造の横穴式石室で、石の多くは抜き取られ、基底部の一部を遺すのみであった。敷石さえ全く遺っていない。床面のレベルは29.5 mほどで、墳丘の基底面に近い。閉塞石は、原位置を留めていたが、開口部に民家があるため墓道からの調査はできなかった。

玄室は、石の抜き跡を含めて復元すると長軸が3.5m、幅は玄門部と奥壁ともに2.3mほどの矩形を呈しており、中央部に膨らみがみられる。西側側壁は、遺りがよい。玄門部と奥壁よりに大型の石材、そのあいだに少し小ぶりの石材を用い、その隙間に小礫を充填している。

羨道部と玄室は、框石を兼ねた仕切り石によって限られており、長方体の袖石がその上に置かれている。西側の袖石は、抜かれているが、閉塞石との噛み合いから羨道は長さ100cm、高さ100cm、幅60cm程度と推定される。閉塞石の両側には石積みが確認できる。これは、両側に礫を積み上げた墓道の存在を示すものである。主軸はN-36°-E。

石室の破壊は著しかったが、該期の石室の構造として特徴的であり、系譜を含めて極めて注目すべき所見が得られた。

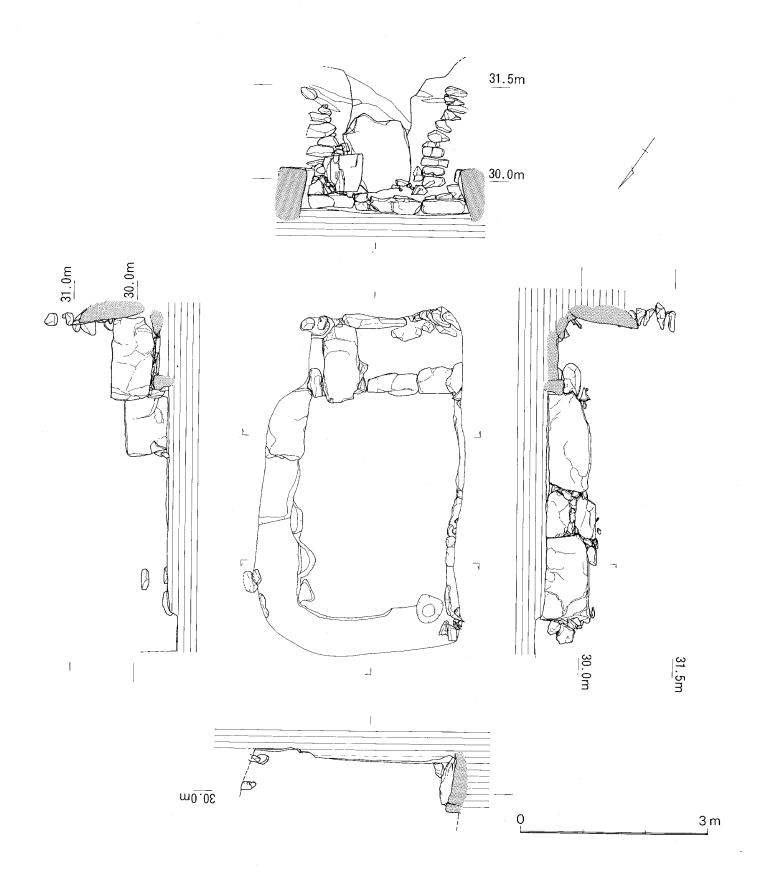


Fig. 6 飯氏二塚古墳石室実測図(縮尺1/60)

#### 葺 石

トレンチによって確認された葺石は、13箇所にのぼる。ほとんど花崗岩の自然石を用いている。

#### 第1号トレンチ(Fig. 7)

南側くびれ部にあたる。二段目のみ遺存していた。矢印の位置でカーブを意識した積み方をとっている。

#### 第2・4号トレンチ(Fig. 8)

北側くびれ部にあたる。一段目、二段目ともに遺存していた。一段目の葺石は開墾によって撹乱を受け、かろうじて基底部を遺すのみである。4号トレンチの基部には、柱状の玄武岩を用いた箇所(矢印)がある。

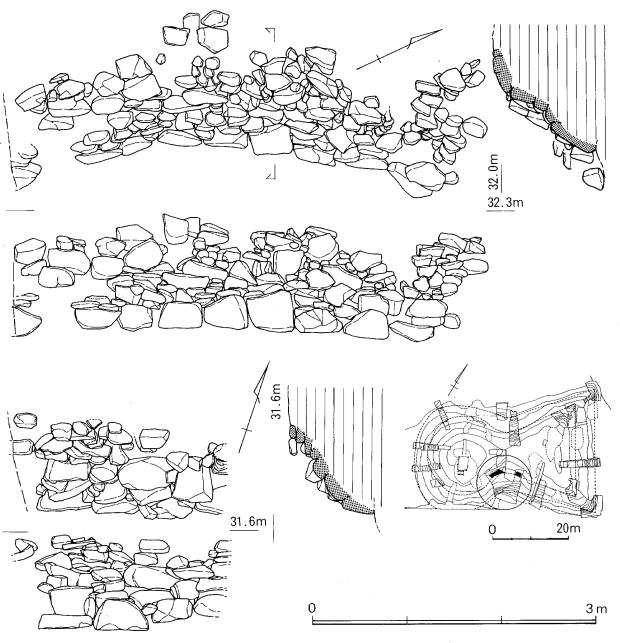


Fig. 7 第1号トレンチ 葺石検出状況 上・西/下・東(縮尺1/40)

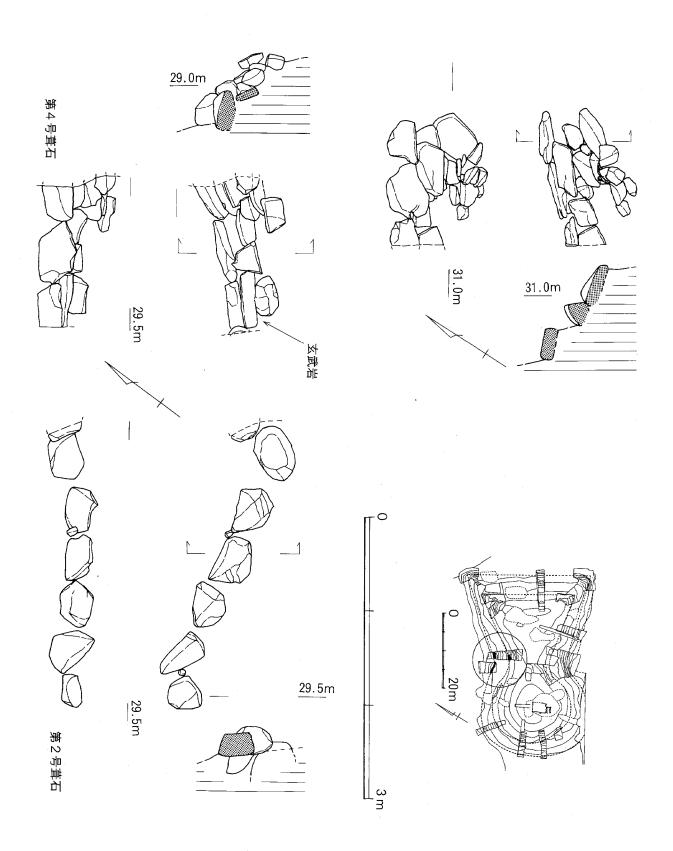


Fig. 8 第2・4号トレンチ 葺石検出状況 (縮尺1/40)

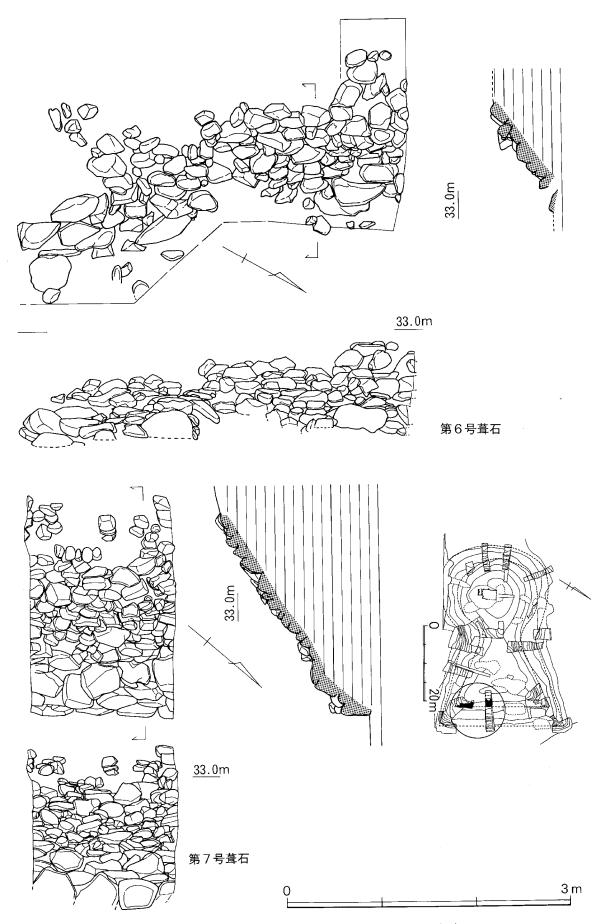


Fig. 9 第6・7号トレンチ 葺石検出状況(縮尺1/40)

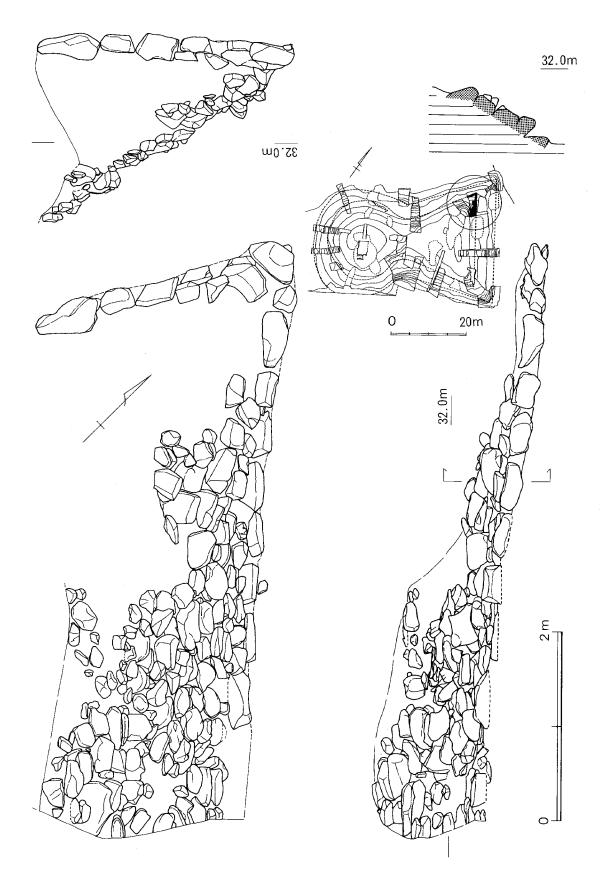


Fig. 10 第9号トレンチ 葺石検出状況(縮尺1/40)

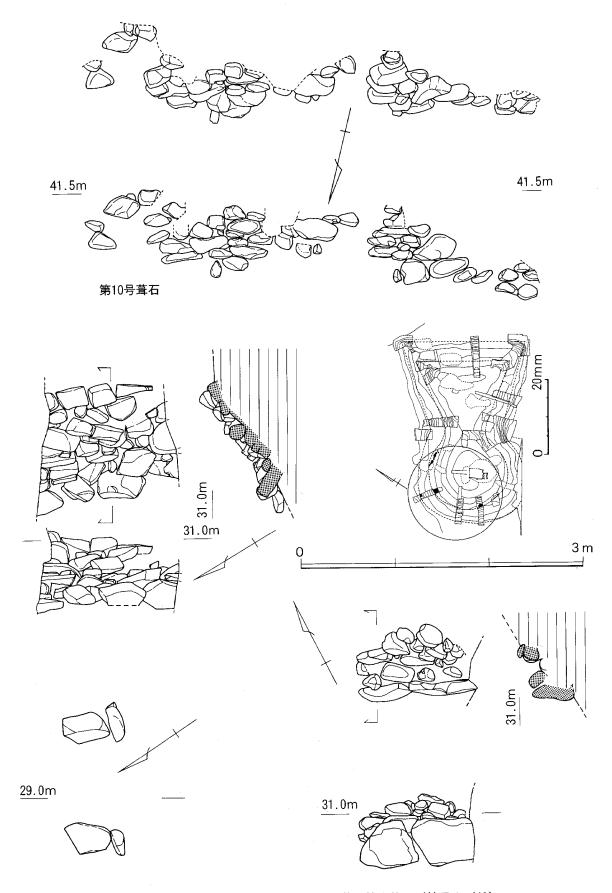


Fig. 11 第10・11・13号トレンチ 葺石検出状況 (縮尺 1 / 40)

#### 第6号トレンチ (Fig. 9)

前方部南側にあたる。二段目のみ遺存していた。基底部は、隅に近い部分が東側にずれ込んでいる。 南面を構成するコーナー部分を欠く。

#### 第7号トレンチ (Fig. 9)

前方部中央にあたる。二段目のみ遺存していた。基底部は、原位置をとどめるが、上部はかなり欠落する。

#### 第9号トレンチ (Fig. 10)

前方部北側にあたる。二段目のみを遺存する。基底部の隅に近い部分がよく遺っている。上部は欠落が著しい。

#### 第10号トレンチ (Fig. 11)

後円部北側にあたる。二段目のみ遺存していた。基底部の遺存状況は、不明。急斜面に露頭した部分をとりあえず図におさめた。かなり欠落している模様。

#### 第11号トレンチ (Fig. 11)

後円部北西にあたる。一段目、二段目ともに遺存していた。一段目の葺石は開墾によって撹乱を受け、かろうじて基底部を遺すのみである。二段目の基底部は、原位置をとどめるが、上部は欠落が著しい。

#### 第13号トレンチ (Fig. 11)

後円部西側の二段目の基底部にあたる。上部は欠落が著しい。

#### 第14号トレンチ (Fig. 12)

後円部南西部の二段目の基底部にあたる。上部は欠落が著しい。

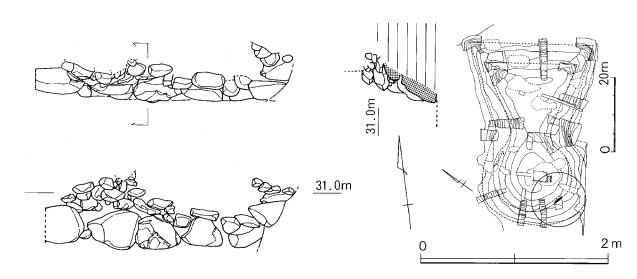


Fig. 12 第14号トレンチ 葺石検出状況(縮尺1/40)

#### 土 層

前方部と後円部で各一箇所、葺石の遺っていないトレンチを地山まで掘り下げた。さらに石室奥壁に土層観察のトレンチを追加した。

#### 第5号トレンチ(Fig. 15)

前方部南側にあたる。地表から1mから1.8mにわたって撹乱を受けており、花崗岩が風化した地山を削りだした基盤に褐色や黒色の土を突き固める。上部の遺りが悪く、築造過程をしめす最適な土層とはいいがたい。

#### 第12号トレンチ (Fig. 14)

後円部西側に設定した。花崗岩が風化した地山を削りだした基盤に褐色や黒色の土を突き固める。 土層観察から、地業は三期で捉えられる。

第一期・・・・・細かい縞状の堆積を基盤とする。周辺から土を寄せ集めた粗い整地といった印象を受ける。

第二期・・・・・褐色や黒色の土を交互に突き固めたもの。

第三期・・・・・赤褐色土を用いて墳丘の表面を赤い色で仕上げる。

#### 第15号トレンチ (Fig. 13)

石室の奥壁を幅60cmにわたって掘り進めたもの。基本的に第12号トレンチの観察結果を追認するものであるが、根による撹乱が少なく、遺存度がよい。

以上、奥壁の観察から後円部の4.5mの墳丘は、すべて盛土によるもので、最上部に赤味がかった色の土を用いることにより、葺石の白色との対比を意図したモニュメントであったことがうかがえる。また二期と三期の間に腐食土層がみられるが、埋葬時に赤褐色土を用いて墳丘の表面を赤い色で仕上げたと解釈するなら、その層に墳丘の築造から埋葬までの時間の経過を見込むことができよう。

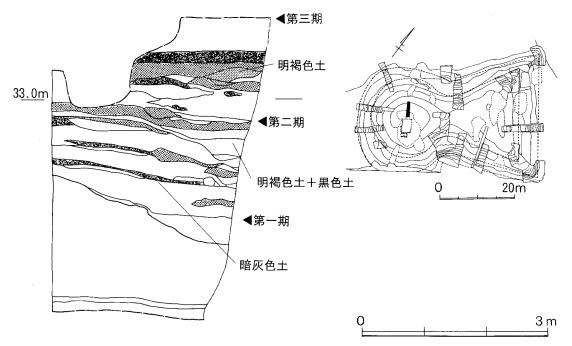


Fig. 13 第15号トレンチ 西壁土層図 (縮尺 1 / 60)

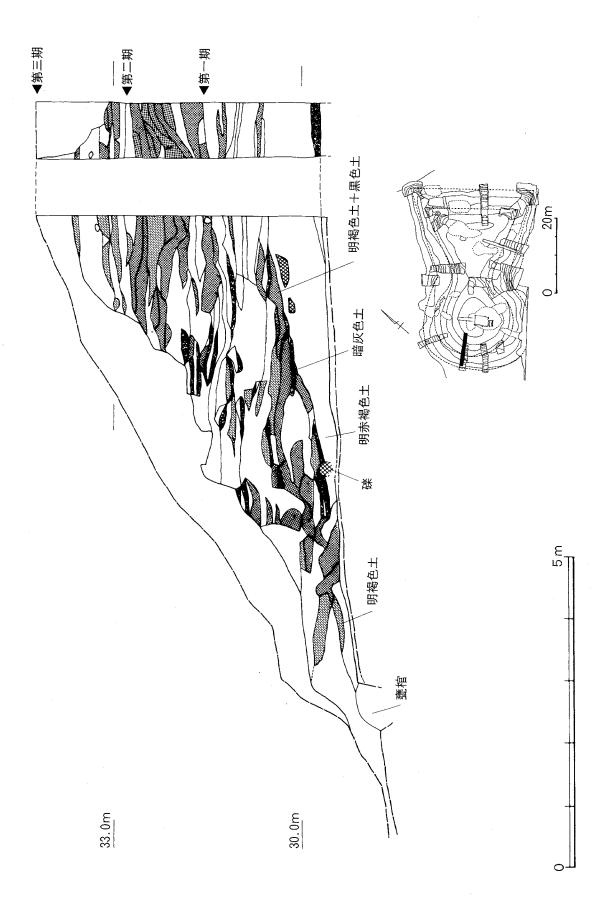


Fig. 14 第12号トレンチ 北壁土層図(縮尺1/60)

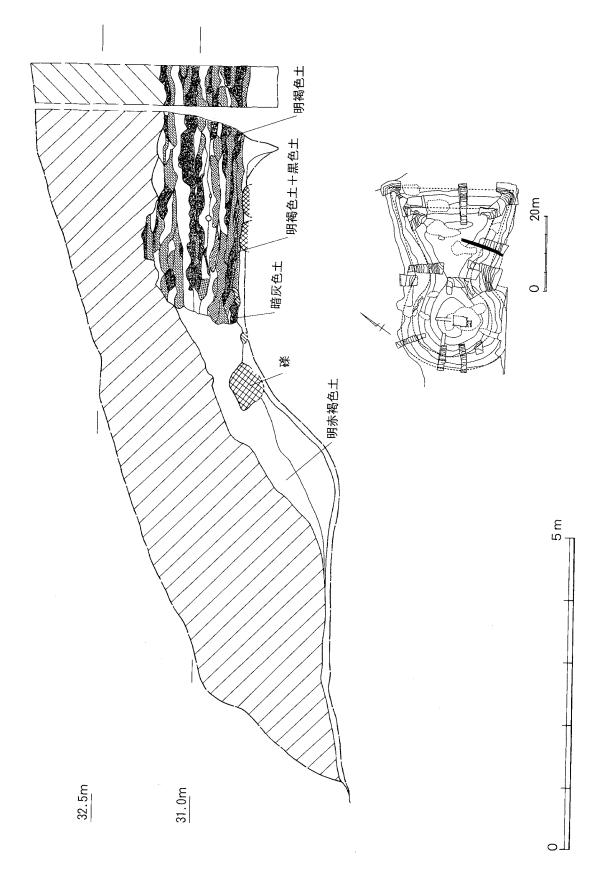


Fig. 15 第5号トレンチ 西壁土層図(縮尺1/60)

## 第2章 出土遺物

馬具類とガラス玉は石室内で、須恵器はすべてくびれ部で検出された。分布は圧倒的に南側のTー1に集中していた。また出土位置は、葺石から浮いていた。

### 須恵器

001. は、蓋杯あるいは有蓋高杯の蓋部である。全周の1/5を存し、復元口径16.0cmをはかる。口縁端部は段をなし、稜は明瞭で、天井部は回転による削り痕がみられる。青灰色を呈す。今回出土した他の蓋はすべて有蓋高杯のものであり、口縁端部に明瞭な段はみられない。

002.は、脚付壷の蓋部で、003.とセットである。口径12.8cm、高さ4.4cmをはかる。口縁端部に段を有する。天井部のやや下から口縁部外面にかけて自然釉を付す。つまみ中央部は凹み、上面は平坦である。

003.は、有蓋式脚付壷である。口径10.9cmで、高さ28.2cmをはかる。口縁端部に段を有し、頸部に 櫛描波状紋を回らす。胴部は、叩き成形ののち、カキ目調整を加える。底部に成形時の接合痕がみら れる。脚部には櫛描波状紋を回らしたのち、三角形の透しを四方から切り込んでいる。肩部と脚部に 自然釉を付す。

004.の 004. ほぼ完形で、口径12.5cm、高さ14.1cmをはかる。 頸部と胴部に細かい単位の 櫛描波状紋をめぐらす。 胴部過半から底部にかけてはヘラ削りの後なでを加える。 黒灰色を呈し、胎土は、木目が粗く軟質である。

005.は、器台あるいは脚付壷の脚部である。小片から復元した。櫛描波状紋を回らしたのち、四段にわたって三角形の透しを切り込んでおり、透しは上から4・5・7・8程度であろう。器部または 壷の内面に当て具の痕跡がある。

006.から015.は、有蓋高杯である。厳密なセット関係はわからないが、噛み合いの良いもの同士を割りふった。全体の傾向としていえることは、高杯に焼成時の歪みが著しいことで、これは蓋の外面にみられる痕跡から重ね焼きの際にかかった重みによるものである。色調は、一様に黄味を帯びた灰色を呈し、胎土の質感も同様である。

006.は、口径16.0cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみを欠く。天井部に径8.8cmの重ね焼きの跡がみられる。

007.は、天井部から稜部にかけての破片である。天井部にカキ目を加える。つまみは、中央部に向かって凹む。天井部に径12.5cmの重ね焼きの跡がみられる。

008.は、口径16.7cm、高さ6.1cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみは、頂部が平坦である。

009.は、口径16.2cm、高さ6.6cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみは、中央部に向かって凹む。

010.は、口縁端部を欠くが、復元すると、口径14.0cm、高さ14.8cm程度である。脚の上部にカキ目を施し、三箇所に透しを切り込む。裾部は屈曲して終わる。裾部の径10.8cmをはかる。

011.は、口径14.0cm、高さは、焼き歪みが著しいが、15.2cmから16.5cmをはかる。脚の上部にカキ目を施し、三箇所に透しを切り込む。裾部は屈曲して終わる。裾部の径10.9cmをはかる。

012.は、口径16.0cm、高さ6.2cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみは、中央部に向かって凹む。天井部に径11.4cmの重ね焼きの跡がみられる。

013.は、口径17.0cm、高さ6.9cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみは、中央部に向かって凹む。天井部に径8.0cmの重ね焼きの跡がみられる。全体の3/4を存す。

014.は、口径15.0cm、高さは、焼き歪みが著しいが、12.7cmから15.3cmをはかる。杯部下半と脚の筒部にカキ目を施し、三箇所に透しを切り込む。裾部は短く屈曲して終わる。裾部の径10.8cmをはかる。

015.は、口径15.0cm、高さは、焼き歪みが著しいが、14.0cmから17.2cmをはかる。杯部下半と脚の筒部にカキ目を施し、三箇所に透しを切り込む。裾部は端部が面をなして終わる。裾部の径10.6cmをはかる。

016.は、大甕の口頚部である。復元口径46.0cmをはかる。北側のくびれ部で出土した。口縁下に一条と二条の突帯を付し、その間に細かい単位の櫛描波状紋を回らしている。暗灰色を呈する。

017.の大甕は、口縁部から胴部と胴部下半に分かれている。図上で復元すると高さは107.4cmになる。 口頚部を突帯と沈線によって三分割し、カキ目を施したのちへラの先端状の工具によって波状紋を回 らす。胴部外面に平行叩きによる成形を行ない、内面に当て具の痕が全面にみられる。016.にくらべ 突帯は、シャープさを欠き、波状紋も簡略化の傾向が伺える。

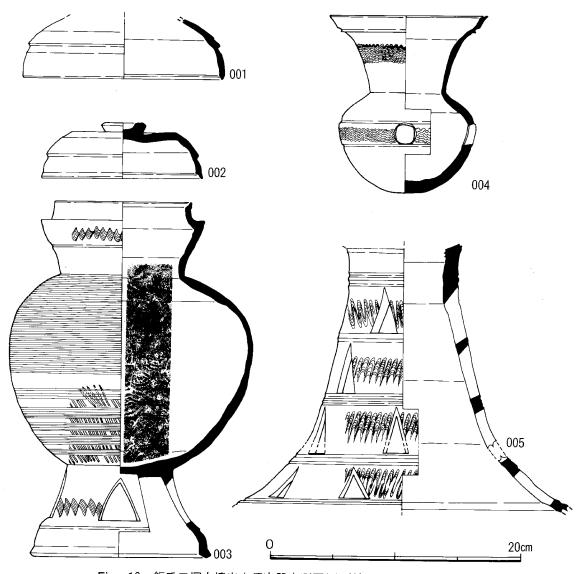


Fig. 16 飯氏二塚古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺 1 / 3)

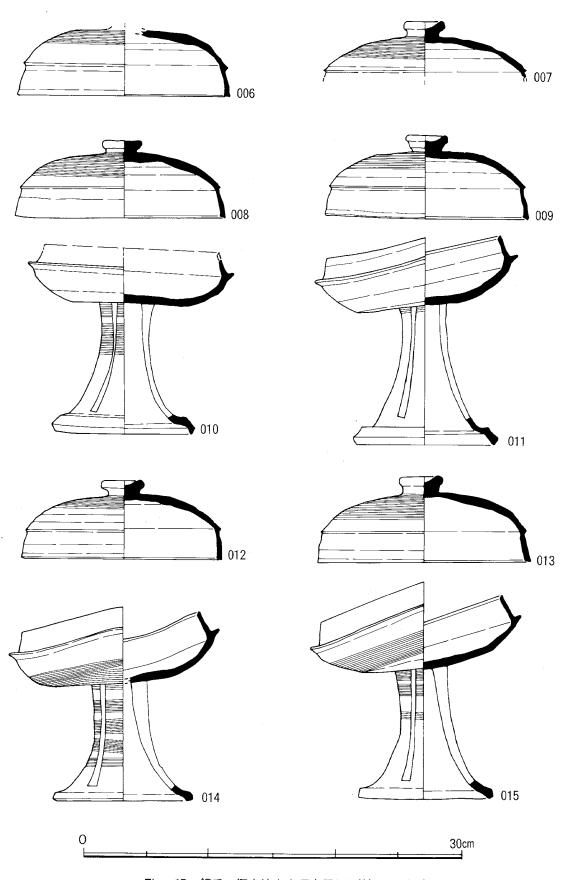


Fig. 17 飯氏二塚古墳出土須恵器(2)(縮尺 1 / 3)

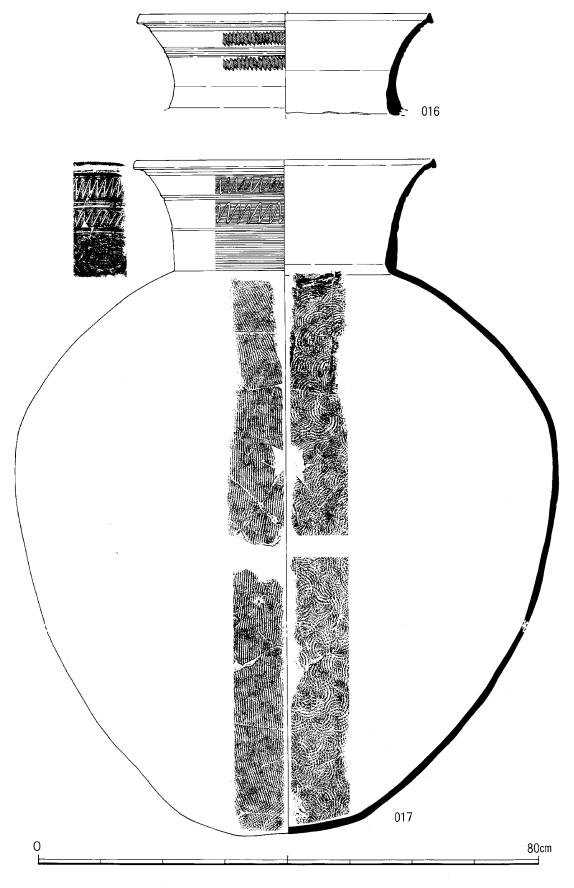


Fig. 18 飯氏二塚古墳出土須恵器実測図(3)(縮尺1/6)

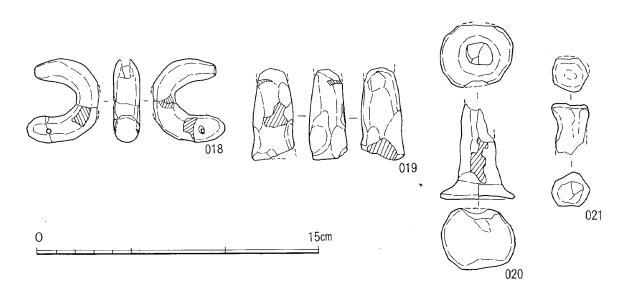


Fig. 19 飯氏二塚古墳出土の土製品(縮尺1/2)

#### 土製品

018.の土製勾玉は、第12トレンチの第Ⅱ期、褐色や黒色の土が交互に突き固められた層から出土し た。全長4.3cm、厚さ1.4cmをはかる。

019.の土製品は、肝心の部分が欠失しており器種の特定はできない。

020.は、ミニチュアの器台と思われる。受け部を欠く。現存高5.0cm。

021.は、細片であるため器種の特定ができない。

019.以下は、出土地点不明。

#### 玉 類

115

6.2

ガラス玉のほとんどは石室の床面の土を洗浄して確認された。42が緑透色を呈する以外は、すべて 紫紺色を呈する。径1 c m前後で大粒の玉と5、6mmのものとに二分される。

飯氏二塚古墳出土ガラス玉									
遺物番号	直径	長さ	遺物番号	長径	長さ	遺物番号	直径	長さ	
101	10.9	9.9	116	6.0	4.3	131	5.0	4.3	
102	10.7	9.1	117	6.1	4.8	132	5.4	4.3	
103	9.3	10.1	118	6.2	4.2	133	5.3	4.5	
104	5.6	5.3	119	6.1	4.6	134	5.5	4.0	
105	5.9	4.9	120	6.1	4.6	135	5.5	4.0	
106	6.0	4.5	121	6.0	4.2	136	5.5	3.6	
107	6.0	5.0	122	6.3	4.6	137	5.5	4.0	
108	5.9	4.7	123	5.9	4.5	138	5.0	3.6	
109	5.9	4.5	124	6.1	4.0	139	5.7	3.6	
110	5.8	4.5	125	5.8	4.6	140	5.5	3.6	
111	5.9	5.1	126	5.3	4.6	141			
112	5.8	4.6	127	4.9	4.7	142			
113	5.6	5.4	128	5.3	4.2				
114	5.9	4.9	129	5.2	4.3	Ě	単 体-mm		

5.3

4.7

130

4.1

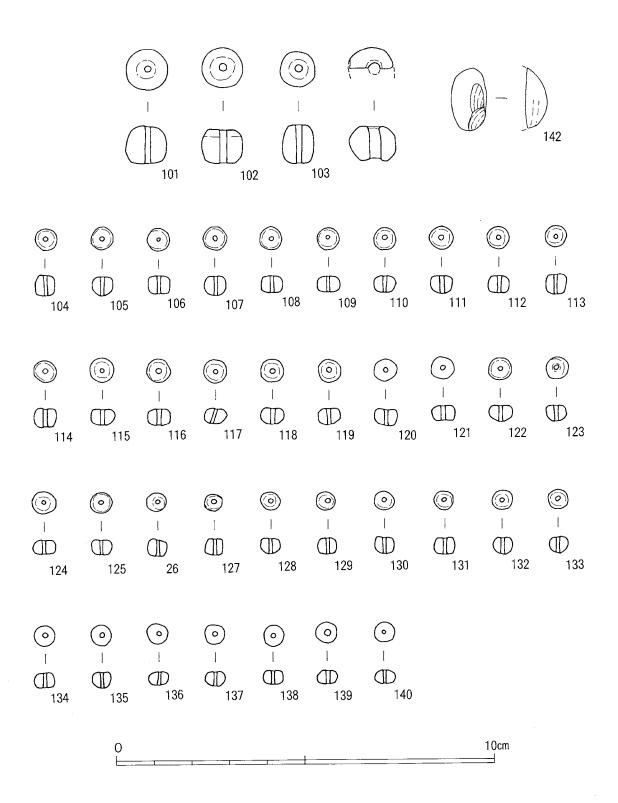


Fig. 20 飯氏二塚古墳出土の玉類(原寸大)

### 飯氏二塚古墳出土の馬具

宮代 栄一

飯氏二塚古墳からは方形の雲珠辻金具の脚の破片が計17点出土している(1図)。これらは大型のものとやや小型のものに大別することができ、さらにこれらに伴うと考えられる責金具が7点、遊離した形で見つかっている。このほか環状雲珠ないし環状鏡板付轡の破片と思われるもの1点が確認されている。

脚の破片は環を中心に方形や半円形の金具を配する「環状雲珠辻金具」に伴うものとみて間違いない。轡大型の雲珠辻金具の破片はいずれも一辺の長さが約2・5cmの正方形で、鉄地金銅張。7点が確認されている。表面に直径約5ミリの鉄地銀張の鋲を5個ずつ打つ。裏面に革と思われる有機質が残っているものがあり、鋲の脚はこの皮革を貫いたのち、裏側からたたいて留められている。鋲脚の長さや皮革の残り具合からみて、この繋(がい=馬の飾りベルトのこと)に用いたと考えられる帯状の有機質の厚さは4ミリ前後であったと想定される。

これらの脚部を留める補助の役割を果たしたと考えられる、細長いひも状の責金具は、幅 $3\cdot 3cm$ 、たて幅 $0\cdot 4cm$ ほどで、表面に細かい刻み目を施す。さびが著しく確認できなかったが、鋲と同様に鉄地銀張である可能性が高い。刻み目を同じ方向にそろえるものとそろえないものの2通りの組み合わせが確認されている。表面に5 鋲を打つものとしては、一辺の長さがやや小さめの $2\cdot 2cm$  前後を測るものも2 点出土している。つくりなどは前述のものとほぼ同巧だが、鋲打ちの間隔もやや密になっており、おそらく前述の大型の脚の破片とはやや異なる用途に用いられていた可能性が高い。

以上のものとは別に小型の脚の破片が8点出土している。正方形で、一辺の長さは $2 \cdot 1$  c mから  $2 \cdot 2$  c m。やはり鉄地金銅張だが、大型のものの破片に比べて全体に薄めにつくっているのが特徴 である。表面には四隅に近い場所に鉄地銀張の4鋲を打つ。これらに伴うと考えられる責金具はいずれも遊離しているが、いずれも大型のものより幅がやや狭い。責金具も意識して使いわけをしていたようだ。

これらのほかに厚さ5ミリ、長さ2・4cmの内側にカーブを描く鉄製品が1点出土している。復元すると直径6cm前後の環状をなすと考えられ、環状鏡板付轡の鏡板である可能性は捨て切れないものの、本墳の場合は環状雲珠の破片と考えてもよいのではないか。

復元図を1図の下段に示した。小型の脚は小さめの辻金具に、大型の脚は大きな雲珠に用いられていた可能性が高い。このような組み合わせを持つ環状雲珠辻金具の型式としては、埼玉県稲荷山古墳例をあげることができ、それに基づき、脚数は6脚として復元した。ただし脚は環の周囲に6点だけ配されたわけではなく、その6点の延長上にも連続して複数とりつけられていたものとみられる。筆者が以前に別稿(宮代1993)で述べた通り、このような環状雲珠辻金具の使用は5世紀第2四半期の滋賀県新開古墳南遺構にはじまり、MT85型式期の京都府物集車塚古墳まで続く。ただし脚の形が方形を呈するものは、半円形を呈するものよりやや時期が下がり、TK208型式期以降という年代が与えられよう。よって本古墳出土の馬具から導きだされる時期はTK208型式~MT85型式期ということになる。しかし雲珠に用いられたと考えられる脚がやや大型化していることを勘案すると、MT15型式期~MT85型式期の年代、実年代にして6世紀前半から中頃あたりを想定しておくのが妥当であろう。

筆者の以上のような推定が仮に正しいとすれば、本墳からは雲珠辻金具にかかわる以外の馬具は1

点も出土していないことになる。このことに関しては、盗掘された可能性があると同時に雲珠辻金具以外の馬具が最初から一切副葬されていなかった可能性も示唆している。たとえば埼玉県目沼9号墳 (杉戸町1981) では、木棺直葬の主体部から環状雲珠のみが出土している。さらに滋賀県大通寺古墳 群や佐賀県猿嶽 A 遺跡 S T 0 0 6 (蒲原1980) では、環状雲珠と剣菱形杏葉だけを副葬した例が確認 されている。これらには当初から馬の尻繋にかかわる部分を副葬しようという明らかな意志がみてとることができ、本墳の場合にも同様のことがいえるのかもしれない。

#### 福岡市出土の馬具

この章では前項に関連するものとして、福岡市内から出土した馬具の集成を行った。福岡県内では 現在240基強の古墳で馬具の副葬が知られているが、そのうち福岡市内が後述するように47基を 占める。この数字は九州では大分県や長崎県の全県から出土した馬具の数を凌駕し、熊本県や宮崎県 と肩を並べるもので、市内の古墳の総数がを考えあわせても、かなり多い数字ということができよう。 以下、詳細を記したい。なお紙面の関係から図版の一部しか掲載し得なかったことをお断りしておく。

#### 丸尾2号墳(大庭・力武1985) 福岡市博多区席田字丸尾

直径11~14mの円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡1、木芯鉄板張三角錘形壷鐙の兵庫鎖1が出土した。環状鏡板付轡は左側壁の奥近くから、兵庫鎖は羨道部の右側の石の間から見つかった。

環状鏡板付轡は楕円形の素環状鏡板を伴う型式で、幅6・7cm、高さ6・1cm。単連の兵庫鎖を連結して立聞の機能を果たしている。引手と銜は一カ所で連結される。引手は長さ15・3cmで、引手は先端を曲げない「直引手」である。岡安光彦氏の編年(岡安1984)でいうところのTK43型式~TK209型式期に相当するものであろう。

兵庫鎖は本来 2 点で 1 組となるものだが、 1 点しか見つかっていない。鉸具、三連の兵庫鎖、壷部を覆う舌状金具の 3 つの部分から構成され、兵庫鎖の長さはそれぞれ  $7\cdot 6$  c m、  $7\cdot 8$  c m を測る。舌状金具は先端を欠いており、全長は分からない。栗林誠治氏の編年(栗林 1992)によれば、このような数値は岡山県中宮 1 号墳出土例、埼玉県黒田 1 号墳(花園町1975)出土例などに近く、1 K 4 3 型式期の年代が与えられよう。

#### 堤ケ浦5号墳(吉留1987) 福岡市博多区大字金隈字堤ケ浦

直径13・5mの円墳。複室構造の横穴式石室から轡1が出土している。

轡はその大半を欠いているが、二連銜の鏸轡と想定され、引手の長さ $16\cdot 5$  c mを測る。墓道内の埋土から出土した。銜は馬の口中に入る「くくみの輪」の部分をやや大きめに造っており、幅3 c m、長さ $2\cdot 5$  c mを測る。 T K 2 1 7 型式期に比定される。

#### 堤ケ浦6号墳(吉留1987) 福岡市博多区金隈字堤ケ浦

直径約12mの円墳。横穴式石室から引手の破片1、軽1、鉸具1、銜の破片1が出土した。軽は輪金の部分のみで、長さ6・7cm、最大幅4・6cmを測る。このように輪金の左右が張り出す鞖はMT85型式期に出現し、TK217型式期まで用いられた。法量などからTK209型式期~TK217型式期を中心とする鉸具は輪金の最大幅4・4cm、残存長4・6cmを測る。馬具はいずれも墳丘南側斜面からの出土である。

#### 堤ケ浦7号墳(吉留1987) 福岡市博多区金隈字堤ケ浦

直径約12mの円墳。横穴式石室から耳環、小玉、刀などと共に、石室の前庭部から環状鏡板付轡 1が出土した。環状鏡板付轡は鉸具状に造った立間を持つもので、一部破損しているが、幅5・9 c m、高さ7 c m弱を測る。引手と銜は鏡板を介さずに連結され、引手の長さは14・5 c mである。 T K 2 1 7 型式期の年代が与えられる。

#### 重留A-1号墳 福岡市早良区大字重留字後谷(下條ほか1984)

古墳だが、墳形など不明。横穴式石室から轡1、飾金具1、飾金具1が出土した。轡は鏡板の一部を欠失するが、復元高約7・5 c m、幅7・6 c mを測る大形矩形立聞環状鏡板付轡で、銜と引手は遊環を介して連結される方式である。引手は長さ18 c m。先端部を曲げる端部屈曲引手で、おそらくTK217型式期のものであろう。飾金具は鉄地金銅張で、方形に4鋲を打つ型式である。一辺の長さ約3 c mを測る。法量などからTK209型式期以降の年代が与えられる。

#### 新立表2号墳 福岡市博多区東平尾(大庭・力武1990)

円墳。横穴式石室から鉄製の鏡板付轡1が出土している。残存部などから考えて、鉄製の楕円形鏡板付轡と思われ、残っている鏡板の幅約7 c mを測る。引手と銜は遊環を介して鏡板の外側で連結されていたと考えられる。引手は先端部を曲げる、長さ12 c mの端部屈曲引手である。連結法などからMT15型式期の年代が考えられる。

#### 小松ケ丘1号墳(福岡市1971) 福岡市早良区野方大音

直径12mの円墳。横穴式石室から金環、須恵器、土師器、などと共に馬具が出土した。1970年、福岡市教育委員会の委託によって鈴木重治氏が16基を調査したという。未報告のため、詳細は分からない。

#### 小松ケ丘7号墳(福岡市1971) 福岡市早良区野方大音

直径16mの円墳。横穴式石室から銀環、須恵器、土師器と共に馬具が出土したという。

#### 山崎C1号墳(濱石1994) 福岡市早良区野芥5丁目

円墳。横穴式石室から轡1が出土した。轡は高さ7・6 c m、幅6・3 c mの「鉸具造立聞環状鏡板付轡」で、引手と銜は遊環を介して連結する方式である。引手は破片しか残っていないが、先端部を曲げない「直引手」だったと思われる。TK209型式期のものである。

#### 草場 6 号墳(加藤 1 9 9 2) 福岡市西区下山門字大谷

円墳。横穴式石室から青銅鈴1が出土した。下部床面の腰石付近で矛と共に片付けられたような状況で見つかったという。鈴は面取りをした八角鈴で、直径 $8\cdot 1$  c m、高さ5 c m、鈕の高さ $1\cdot 6$  c mを測る。通常二個しかないはずの「型持ち」の穴が四個あるのが特色である。白木原宜氏の御教示によれば、この種の八角鈴は規格性が高く、MT 85型式~T K 43型式期に集中してみられるという。

#### 早苗田D-10号墳 福岡市西区大字片江(山崎・井上1981)

直径約13mの円墳。横穴式石室から辻金具破片1、飾金具1、衡の破片1が出土した。辻金具は鉄地金銅張で、鉢の部分と脚の一部しか残っていない。鉢部の直径は約3cm、高さは約1cmで全体にかなり偏平である。鉢の肩の部分にわずかに稜がみられ、腹部に凹線などは施さない。TK209型式期以降のものであろう。

飾金具は半円形で表面に二鋲を打つ型式で、残存長2・6 cm。やはり鉄地金銅張である。TK209型式期以降の年代が与えられる。銜は鉄製で残存長約7 cmを測る。

#### 羽根戸E-2号墳(宮井1989) 福岡市西区大字羽根戸

直径9~9・5mの円墳。横穴式石室から鉸具1が出土した。

#### 羽根戸E-3号墳(宮井1989) 福岡市西区大字羽根戸(Fig. 22)

直径12mの円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡1が出土した。環状鏡板付轡は素環状で板状の環を鏡板にするもので、環の直径約6cmを測る。手引きと銜は一緒に連結され、引手先端は、ねじ曲げられた形の「蕨手引手」につくる。TK209型式期以降のものである。

#### 羽根戸E-8号墳(宮井1989) 福岡市西区大字羽根戸

円墳。横穴式石室から木芯鉄板張三角錘形壷鐙1組が出土した。馬具は須恵器の坏の内部から破片で見つかったといい、舌状金具、兵庫鎖などが細辺で確認されている。舌状金具は復元長約15 c m、最大幅8 c mで、残存する鎖の長さなどから見て二連以上の兵庫鎖を連結していた可能性が高い。舌状金具の表面には左右にそれぞれ2鋲を打つ。TK209型式期以降のものである。

#### 羽根戸E-11号墳(浜田・木下1980) 福岡市西区大字羽根戸

直径13mの円墳。横穴式石室から木芯鉄板張三角錘形壷鐙の破片、鞍縁金具、鞍1、飾金具1が 出土した。馬具は羨道部の敷石の間から見つかった。

木芯鉄板張三角錘形壷鐙の破片は全部で3点ある。1点は残存長約11cm、幅2・2cm。鉄地金銅張で表面に同巧の2鋲を打つ。残り2点も残片だが、やはり同じ鐙の一部と考えられる。

鞍の縁金具は鉄地金銅張で長さ2・5 c m、幅0・5 c m。表面に同巧の鋲3個をやや密に打つ。 鞖はT字形の刺金を伴う型式で、板状の脚を不均等にからめて鞍の表面に打ち込む。輪金の最大幅4 c m、長さ6・3 c m。脚の型式などからTK209型式期を中心とする時期のものと考えられよう。 一緒に出土した半球状の金具が、座金具に相当すると思われる。飾金具は菱形で表面に4鋲を打つ鉄 地金銅張のもので、横4・8 c m、縦4 c mを測る。以上のことからこの古墳の馬具には全体として TK209型式期の年代が考えられる。

#### 羽根戸F-2号墳(浜田・木下1980) 福岡市西区大字羽根戸

直径7m前後の円墳と思われる。横穴式石室から「轡の引手の破片と思われるもの」が出土したという。

#### 羽根戸N-8号墳(横山・田中1988) 福岡市西区大字羽根戸(Fig. 24)

円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡1、鞍2が出土した。環状鏡板付轡は楕円形の素環状鏡板に単

連の兵庫鎖を取り付けた型式で、鏡板は縦 $7\cdot 3$  cm、横 $8\cdot 4$  cmを測る。さびがひどくよく分からないが、引手と銜は鏡板を介さず、一カ所で連結されているらしい。単連の兵庫鎖を取り付ける点にやや古い要素がみられるが、全体としてTK209型式期以降のものである。

鞖は輪金の長さ6・6cm、幅4・3cm。座金具は中央が半球にふくらむ鉄地金銅張のもので、周囲を8枚の花弁状につくり、表面に4個の穴をあける。このような座金具をもつ鞖は、福岡県観音山II-12号墳、福岡県竹並F-22横穴などから出土しており、TK209~TK217型式期の年代を与えることができる。このタイプの鞖はいずれも金属製の磯金具を伴わず、鞖の部分だけが金属製であった可能性が高い。

#### 広石Ⅳ-2号墳(山崎ほか編1977) 福岡市西区拾六町字広石

直径9~10・6 m前後の円墳。横穴式石室の石室右袖の部分から環状鏡板付轡1が出土した。 環状鏡板付轡は大形の矩形立聞を持つと考えられるものだが、立聞部分を欠いている。鏡板の幅8・2 c m、残存高7・4 c mを測る。引手と銜は一カ所で共連にされており、引手は端を曲げない「直引手」で、長さ16 c mを測る。TK209型式期のものと考えられる。

#### 広石IV-1号墳(田崎・小畑1989) 福岡市西区拾六町字広石

直径10m前後の円墳。横穴式石室から引手1と兵庫鎖1が出土した。

引手は先端の引手壷の部分で、残存長  $4\cdot7$  cm。端をくの字に曲げるいわゆる「くの字引手」である。このような引手はTK 2 3型式~TK 2 1 7型式期の長い期間にわたって用いられた。兵庫鎖は二連が確認されているが、うち 1 点が完形で幅  $3\cdot5$  cm、長さ 3 cm。おそらく環状鏡板付轡に伴うものと考えられ、MT 1 5型式~MT 8 5型式期の年代が与えられよう。

#### 吉武M-N18号墳 福岡市西区大字吉武高木

円墳。横穴式石室と思われる主体部から素環状鏡板付轡1が出土した。共伴遺物として金製の細い 耳環や環に四匹の龍を浮き彫りにした龍文環頭大刀などが確認されている。未報告だが、福岡市埋蔵 文化財センターで実見の機会をいただいた。

鏡板は鉄製で直径約8cm、ほぼ正円形をなす。はみは二連銜で、両方の「はみ先の輪」と「くくみの輪」との間の部分に45度ずつひねりを加えているのが特徴である。手先は先端を曲げる端部屈曲引手である。

通常の二連銜の場合、一方のはみで「はみ先の輪」と「くくみの輪」の間で鑣を90度ひねり、他方の銜はひねりを加えないという細工を施している。これは「くくみの輪」の連携部分で必然的に直交せざるを得ない銜の方向をはみ先の部分で補正するための処置であるが、本例の場合は双方を45度ずつひねるという技法を用いていることから、一方のみを90度ひねるというものよりも先行するか、系統を異にするものといえるだろう。

千賀久氏によれば、このような45度ずつひねりを加える轡は、5世紀代の「鑣轡」などに類例がみられるという。本墳出土例は「鑣轡」ではなく、環状鏡板付轡であり、環状鏡板付轡にこの種の技法を用いたものは、きわめて珍しい。

以上の形状などから、この轡には、環状鏡板付轡としては最古の段階、TK47型式期の年代を与えるのが妥当と考える。龍文環頭大刀などと同様、朝鮮半島から直接持ち込まれ可能性もあり、とすれば、6世紀以降に盛んに用いられる環状鏡板付轡の祖型の一つになった確率が高い。

#### 吉武塚原L-1号墳(二宮・渡辺1980) 福岡市西区吉武字塚原・天神(Fig. 26)

円墳らしい。原報告では単に「1号墳」と記されているが、現在ではL群に分類されているため、この名称を用いる。横穴式石室から環状鏡板付轡の断片と鉤金具と思われるものが銹着した状態で出土した。TK209型式期以降のものと考えられる。

#### 吉武塚原L-2号墳(二宮・渡辺1980) 福岡市西区吉武字塚原・天神(Fig. 26)

円墳。横穴式石室大型矩形立聞環状鏡板付轡1と木芯鉄板張三角錘形壷鐙の破片1が出土した。T K209型式期のものである。

#### 吉武塚原L-4号墳(二宮・渡辺1980) 福岡市西区吉武字塚原・天神(Fig. 26)

円墳。横穴式石室から轡1、木芯鉄板張三角錘形壷鐙の破片1組分が出土した。これらの馬具はまとまった状態で、玄室左手前隅の須恵器の坏蓋の上に載せられていたらしい。

轡は大形の矩形立聞を持つ環状鏡板付轡で、幅8・6 c m、高さ7・3 c m、立聞部の高さ1・5 c mを測る。引手は一部を欠いているが、残存長10・5 c m。先端部を曲げない「直引手」である。 木芯鉄板張三角錘形壷鐙の破片は、壷の部分を覆う舌状金具、兵庫鎖、鉸具の三つの部分からなる。 復元すると鎖の長さ7・8 c m 前後の三連の木芯鉄板張三角錘形壷鐙だったと思われる。舌状金具は 残存長7 c m で表面に2 鋲を打つ。 栗林氏や斎藤氏の編年に従えば、TK209型式~TK217型式期を中心とする時期のものと考えられよう。この他L 群からは出土古墳は不明であるが、兵庫鎖の 破片1 が出土している。

#### 高崎2号墳(酒井ほか1970) 福岡市西区大字拾六町字高崎

報告書によれば、一辺約15mの方墳と思われる。横穴式石室から鉄地金銅張楕円形鏡板付轡1、環状鏡板付轡1、鐘形杏葉4、雲珠1、辻金具8、木芯鉄板張三角錘形壷鐙1が出土した。馬具類は石室左手前隅の部分から一括で出土したらしい。TK43型式期のものである。

#### 山崎5・6・10号墳(福岡市立歴史資料館1977) 福岡市西区西油山山崎

1974年に大川清氏によって調査が行われたが、未報告のため詳細は不明。10基の古墳からなる群集墳で、 $5\cdot6\cdot10$ 号墳の3基から馬具が出土したらしい。遺物の所在が分からず、実見できなかった。

#### 夫婦塚1号墳(塩屋1980) 福岡市西区乙石(Fig. 23)

直径20mを超えると思われる円墳。横穴式石室から心葉形杏葉2、飾金具2が出土した。馬具類は羨道部敷石上及び石の間から見つかったらしい。

心葉形杏葉は鉄地金銅張で幅4・2 c m、残存高4 c m。杏葉としてはかなり小型の部類に属する。 縁金の部分しか残っていないが、元はこの下に鉄製の地板があり、これらを重ねた上から金銅板一枚 を被せていたらしい。内部の文様は乳状の突起が突き出したような形状で、三葉文杏葉がさらに退化 した型式と考えられる。表面に3鋲を打つ。立聞部を欠失しているが、鉄地金銅張の鋲で繋に装着し たのだろう。TK217型式期以降のものである。

飾金具はやや丸みを帯びた五角形の表面に3鋲を打つもので、こちらも鉄地金銅張である。類例が

少ないが、TK217型式期のものと考えたい。

#### 夫婦塚2号墳(塩屋1980) 福岡市西区乙石

直径約30mの円墳らしい。横穴式石室から飾金具9、鉸具6以上、鞖2、木芯鉄板張三角錘形壷 鐙の破片が出土した。石室は撹乱を受けており、馬具はその中から出土している。

飾金具は5種に大別することができる。まず菱形の表面に4 鋲を打つもので、これが1 点。続いて一部を欠失しているが、半円形の表面に3 鋲を打つもので、こちらは大小各1 点。さらに方形に4 鋲を打つもの1 点、半円形に2 鋲を打つもの3 点、方形にたてに2 鋲を打つものが2 点で、いずれも鉄地金銅張である。いずれも小型でTK209 型式期以降の特徴を備えている。

鞍は輪金の長さ6・2cm、最大幅4・2cm。別造りの板状の脚をからめて、鞍の表面に打ち込むが、先端部を欠く。座金具は平面が円形の半球状のもので、このような型式の鞍は年代幅が大きく、島根県上島古墳から福岡県新延大塚古墳まで、MT85型式~TK217型式期に用いられた。木芯鉄板張三角錘形壷鐙の破片はいずれも壷部につく舌状金具で、うち1点は長さ9・1cmで、表面に2鋲を打つ。このような舌状金具は、おそらく斎藤弘氏のいう「三G式」(斎藤1986)に相当するもので、TK217型式期のものである可能性が高い。以上のことから考え、夫婦塚2号墳の馬具にはTK217型式期を中心とする年代を与えるべきだろう。環状鏡板付轡の破片の可能性のある鉄製品も1点出土しており、元来は轡・鞍・鐙などを含めた金銅装馬具の組み合わせであった可能性が高い。

#### 梅林古墳(浜石ほか1991) 福岡市城南区大字梅林

全長約27mの前方後円墳。横穴式石室から鉸具4、鞖1、鞍縁金具2、同覆輪2、環状雲珠の脚部2が出土した。鉸具は大型のものと小型のものの2種類がある。鞍は鞍に打ち込んだ輪金の先端部だけが出土した。輪金の上部は残っていないが、全体を一体づくりにし、先端部を打ち込んだ後、横棒をはめ込んで固定する。このような固定の方法はTK208型式期の岡山県天狗山古墳にはじまって、MT15型式期の兵庫県園田大塚山古墳まで用いられた。よってこの馬具の下限はMT15型式期である。

#### タカバン塚古墳(吉留ほか1993) 福岡市城南区大字梅林字平原

直径 $16\sim19$  mの円墳で、主体部は横穴式石室。鉸具の破片1、兵庫鎖片1、環状雲珠ないし轡の破片と思われる鉄片1 が出土している。盗掘を受けており、馬具はいずれも主体部の撹乱中から出土した。

一 鉸具の破片と考えられる金具は、鉸具の角の部分にあたると想定され、長さ約6 c m を測る。兵庫 鎖片は素環状鏡板付轡の立聞部に連結したと思われるもので、このような連結式の立聞を持つ轡には MT 15型式期~TK 43型式期の年代を与えることができる。 残る1点は断面が薄い長方形をなす環状の金具の一部と思われるもので、このような形状を呈するものとしては「環状雲珠」ないし、板状の素環状鏡板をあげることができる。仮に環状雲珠であるとすればTK23型式期~MT85型式期、素環状鏡板だとすればTK209型式期以降の年代が与えられる。

#### 神松寺御陵古墳(1978) 福岡市城南区大字片江

全長20mの前方後円墳。横穴式石室から兵庫鎖の破片2と環状鏡板付轡の破片1が出土した。いずれも前室の左奥でまとまって発見された。

兵庫鎖の破片は1点は破片で、全体の形状を復元することができないが、もう1点は長さ8・3 cm、最大幅3・2 cmを測る。共に木芯鉄板張三角錘形壺鐙に使われたものである。本例に近い数値を示す兵庫鎖は、栗林誠治氏の編年によれば、四連の鎖をつけた奈良県三里古墳例の3番目と4番目(いずれも鉸具側から数えて)、三連の鎖をつけた岡山県中宮1号墳例の2番目などの例があり、MT85型式期にその中心があるという。本墳出土の須恵器類の中にはTK209型式期まで下ると思われるものが存在するが、以上のような理由から、この馬具に関しては、MT85型式~TK43型式期という年代を与えておきたい。これらはおそらく神松寺御陵古墳の埋葬でも、おそらく初葬に伴うものではないだろうか。環状鏡板付轡の破片(残存長約4cm)もやや大形のもので、このような年代観と相違しない。

#### 倉瀬戸4号墳(小田ほか1973) 福岡市城南区大字片江字倉瀬戸

直径約17mの円墳。横穴式石室から大形矩形立聞環状鏡板付轡1が出土した。現品は所在不明のため、実測できなかったが、報告書所載の実測図によれば、鏡板は立聞を欠くが、幅8cm、高さ6・5cmを測る。TK217型式期のものであろう。

#### 倉瀬戸7号墳(小田ほか1973) 福岡市城南区大字片江字倉瀬戸

直径約10 mの円墳。横穴式石室から素環状鏡板付轡1 が出土した。やはり実物を確認できなかったが、実測図によれば、直径5 c mの正円形素環状鏡板をもつ環状鏡板付轡と推定される。図面によれば、伴う引手は長さ14 c mの二条線引手で端部を幅3 c mの引手壷につくる。このような組み合わせは類例がないが、鏡板の大きさが極端に小さくなっていることや、舶載品としてT K 2 0 9型式期以降に盛んに入ってくる轡などにみられる二条線引手を採用していることなどから、やはりT K 2 0 9型式期以降の年代を与えるのが妥当と考える。

#### 三苫京塚1号墳(瀧本1991) 福岡市東区大字三苫字京塚157

推定直径13~15m、高さ約3~5mの円墳。横穴式石室から轡、引手、鉄製輪鐙破片、貝製雲珠2以上、同辻金具破片、鉤金具破片3、宝珠飾1、花形座2、鞍金具覆輪破片1、飾金具11以上が出土した。これらはいずれも玄室から細片の状態で見つかったらしい。

貝製雲珠はいずれも細片で、鉄地金銅張。鉢部の復元直径は7・3 c m で、長さ2・3 c m の棘花 弁形脚6を均等に配置する。腹部には二段の凹線を施す。鉢の中央部は中空で、この部分に現在はなくなってしまっているが、白色のイモガイがはめ込まれていたものと想定される(宮代1989)。接合の可能な細片からみて、おそらく2点以上の雲珠があったと見るべきであろう。

一方、脚の中央にはいずれも幅 0 · 7 c m程の半円形の飾り穴があけられており、金銅製の 3 鋲と

無文の責金具1本で繋に装着する。このように脚に飾り穴をあける例としては、佐賀県鏡山古墳、山口県山下古墳などの出土例がある。これらの飾り穴は、これらとセットになる杏葉(多くの場合、心葉形杏葉)の立聞の飾り穴に対応する形であけられることが多く、盗掘を受けているものの、おそらく三苫京塚1号墳でも、当初はこのような杏葉を伴っていた可能性が高い。同時に出土した鉤金具の破片3点はこれらの杏葉に使われたものだろう。

辻金具も雲珠と同巧であり、少なくとも2点以上存在したことは確実と思われる。TK209型式期のものである。さらに宝珠飾1と花形座2は、おそらくこの雲珠・辻金具に伴う。宝珠飾は金銅製、花形座は鉄地金銅張だが、貝製雲珠辻金具の場合、中央に宝珠飾や花形座を載せない例が大多数であるだけに、むしろ珍しい例ということができよう。

飾金具はいずれも鉄地金銅張で、半円形でたてに2鋲を打つもの(欠失分含む5点)、五角形に近い形状で表面に2鋲を打つもの(6点)に大別される。このほか半球状雲珠辻金具の脚の破片と思われるものが4点ある。一鋲半円形脚2点と一鋲方形脚2点で、このことから類推すると、方形脚と半円形脚を交互に配置した半球状雲珠であった可能性が高い。こちらはTK217型式期の製品である。以上のことからみて、三苫京塚1号墳には2組以上の馬具の副葬があったと考えざるを得ない。初葬は出土した須恵器に対応するTK209型式期であり、続くTK217型式期に追葬が行われた可能性が高いと思われる。

#### 猿の塚古墳(柳田ほか1971) 福岡市東区上和白

円墳。横穴式石室から轡1、兵庫鎖1、飾金具1、鞍1、「杏葉と思われるもの」1が出土した。轡は高さ9・6 c m、幅7・3 c mの岡安光彦氏のいう「瓢形素環状鏡板付轡」で、引手と銜は鏡板を介して別々に連結する。引手は長さ16・5 c mで先端部を屈曲させる端部屈曲引手である。兵庫鎖は1点の長さ8・7 c m前後を測る3連のもので、先端に舌状金具と鉸具を取り付ける。杏葉と思われる金具は鉄製で幅6・6 c m、高さ5・7 c m。内側に心葉形の透かしを入れるが、その上部に約1 c mの兵庫鎖1点を表面に打ち込む。形などからみて杏葉とするのが妥当と思われるが、このような兵庫鎖を打つものは他に類例がなく、理解に苦しむ。時代としては総合的にみて、TK43型式期~TK209型式期を考えるべきだろう。

#### 高見1号墳(柳田ほか1971) 福岡市東区上和白

墳形不明。横穴式石室から環状鏡板付轡1、鉸具1が、閉塞石下の礫床の間から見つかった。

環状鏡板付轡は大形の矩形立聞を伴うもので、たて $6\cdot 1$  c m、幅 $5\cdot 8$  c mを測る。鏡板に引手の一部がくっついているが、環の一部をねじって飾るという、岡安光彦氏のいう「江田船山型端環装飾」を施す。引手ははしの部分をねじ曲げた、いわゆる「くの字引手」(端部屈曲引手)で長さ $12\cdot 2$  c mを測る。 T K 217 型式期以降のものであろう。鉸具は全体を方形につくるもので、長さ $6\cdot 9$  c m、幅 $3\cdot 8$  c m。棒状の鉄棒を刺金としてからめる。

#### 高見2号墳(柳田1971) 福岡市東区上和白

直径7~8mの円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡1が、石室の閉塞石付近から出土したらしい。 環状鏡板付轡は正円形の素環状鏡板を伴う型式で、環の直径5・3cmを測る。TK209型式期 のものであろう。

#### かけ塚山古墳 福岡市東区かけ塚山(福岡市1975)

古墳だが、破壊され墳形など不明。採集資料として鞍の磯金具3、兵庫鎖の破片1、鉄地金銅張鏡板付轡の破片1が出土した。鞍の磯金具は鉄地金銅張で、周囲をやや欠いているが、前輪につけられたものが長さ約17cm、後輪に用いられたものが長さ約20cmを測る。いずれも鉄地金銅張で、縁金具の上からやはり同巧の鋲を密に打つ。磯金具の上部にみられる方形の突起については、かなり欠失しているので現状を保っているとは考えがたい。後輪の磯金具の表面には円形で板状の鉄地金銅張の座金具を載せる。鏡板付轡の破片と思われるものは長さ約2cmの鉄地金銅張製品で、おそらく十字文透かしを持つ心葉形鏡板付轡の外側の縁金の一部だと思われる。

#### 柏原A-2号墳(山崎編1986) 福岡市南区柏原字荒谷外(Fig. 27, Fig. 28)

全長30~40mの前方後円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡2(仮にabと呼ぶ)、鞍2、木芯鉄板張三角錘形壷鐙2、辻金具2、飾金具7、鉸具2が出土した。これらの馬具は三群に分かれて出土したらしい。まず玄室手前左袖の付近から轡と辻金具が、玄室の左壁側から須恵器の坏などと共に他の馬具類が、右壁側から鐙が見つかったという。

環状鏡板付轡 a は楕円形の素環の鏡板を伴うもので、鏡板の幅 8 ・ 2 c m、高さ 5 ・ 8 c m。引手と銜を一カ所で連結し、長さ 1 4 ・ 5 c mの端部屈曲引手をつける。岡安光彦氏の編年ではT K 217型式期に相当する。

環状鏡板付轡 b は 2 点あったはずの鏡板のうち、 1 点しか見つかっていない。正円形の素環状鏡板で直径  $5 \cdot 8$  c m、環の厚み  $0 \cdot 5$  c mを測る。銜は過剰のねじりを加えた蕨手状のもので、 1 点あたりの長さ  $7 \cdot 8$  c m、環の直径約 8 c mを測る。引手はひねりを施さない「直引手」で、残存長  $8 \cdot 5$  c m、環の直径は  $2 \cdot 4$  c mである。このような鏡板付轡は他の型式の環状鏡板付轡と同じく、時代が下るに従って環状鏡板の直径が小さくなっていく傾向が認められ、おそらく T K 2 0 9 型式期のものと考えられる。

鞖はいずれもT字形の刺金を持たない型式で、輪金の最大幅4・6cm、屈曲部の幅2・3cm、長さ6・2cmを測る。鞖の脚部は0・9cm程の細長い鉄板で、それを不均等な長さで輪金にからめて、鞍の表面に打ち込んだと考えられる。このように脚を不均等にからめる型式の鞖は、奈良県三里古墳、福岡県新延大塚古墳などから出土しており、TK43~TK217型式期の年代を与えることができる。それぞれ半球状で正円形の座金具を伴う。木芯鉄板張三角錐形壷鐙2点はいずれも、壷部をかたどる舌状金具の一部で、1点は鉄板を上からたたきとめて、補修を施した跡が見られる。残存長5・6cm、最大幅4・2cm。鋲は1点しか確認できていないが、TK209型式期~TK217型式期のものであろう。

辻金具は鉄地金銅張で、中央に低い鉢部を持っており、筆者のいう「偏平鉢状辻金具」(宮代1993) に相当する。このような鉢部を持つ辻金具はTK23~TK43型式期に盛んに用いられたが、本例 はその中では例外的に、TK209型式期に属する製品と考えられる。鉢部の頂上には直径0・9cmの鉄地金銅張の鋲を打つ。脚は半円形脚でやはり鉄地金銅張の3鋲で繋に装着した。特筆すべき点は、鉢部頂上の鋲の先端が鉢のはるか下まで貫通していることで、おそらく脚部の鋲と共に、この辻金具全体を繋に固定する役割を果たしていた。このような例としては、大分県天満古墳(別府大学付属博物館1979)出土例などがあり、TK209型式期に特徴的な要素である。

飾金具は半円形で2鋲を持つものと菱形で4鋲を打つものに大別されるが、うち3点は細い鉄棒を 渦巻き状にねじり、その上部に3鋲を打った円形の金具を取り付けた、他に類例をみない形状のもの である。いずれも非常に小型でTK217型式期以降のものである可能性が高い。

#### 柏原 E-1号墳(山崎編1986) 福岡市南区柏原字荒谷外

直径約14mの円墳。鉸具2が羨道の後半部分から出土している。鉸具は長さ $7\cdot9cm$ 、最大幅 $5\cdot4cm$ のかなり大形のもので、棒状の刺金をからめて取り付ける。TK43型式期の年代を与えたい。

#### 柏原 H-1号墳(山崎編1986) 福岡市南区柏原字荒谷外

直径約12mの円墳。環状鏡板付轡の破片1、木芯鉄板張三角錘形壷鐙の破片1、鉸具1が出土した。いずれも羨道部後半部の右側壁際から見つかっている。

環状鏡板付轡は立聞を鉸具状に造る「鉸具造立聞環状鏡板付轡」だが、立聞の部分しか残っていない。立聞部は推定で幅3・6cm、高さ2・8cm程度と考えられる。これらは岡安光彦氏の指摘する「環状鏡板付轡の規格品」に見られる値と極めて近く、おそらくTK217型式期の年代を与えられるだろう。

木芯鉄板張杓子形壷鐙の破片は、騎乗者が足を収める壷の部分に用いられる舌状金具である。幅4・3cm、残存長約8cmで、表面に鉄製の2鋲を打つ。斎藤編年のTK217型式期に相当する。鉸具は長さ6・8cm、最大部分の幅4・8cmで、やはりTK209型式~TK217型式期の幅の中で考えるべきものである。

#### 柏原 J - 1号墳(山崎編1986) 福岡市南区柏原字荒谷外

直径約 $13 \cdot 5$  mの円墳。鉸具1 が出土した。一部を欠失しているが、幅 $4 \cdot 8$  c m、長さ $7 \cdot 8$  c mを測る。玄室の床面近くで見つかった。 T K 43 ~ T K 209 型式期のものであろう。

#### 老司古墳(山口ほか編1987) 福岡市南区老司

前方後円墳。3つの竪穴系横口式石室から轡の銜5点、鞍の覆輪の破片2、鉸具1が出土している。 銜は細い鉄棒2本をあわせて捩り、両端に環をつくるもので、大中小の3種が認められる。覆輪はい ずれも一番先端の部分のみが出土している。

#### 大牟田古墳群 福岡市南区柏原字大牟田(福岡市立歴史資料館1977)(Fig. 24, Fig. 25)

かつて三島格氏らによって1969年から70年にかけて調査が行われた。計43基からなる群集 墳といわれるが(佐田茂ほか1971)、未報告で詳細は分からない。福岡市埋蔵文化財センターに収 蔵されている鉄器類を調査させていただいたところ、1号墳、2号墳、12号墳、14号墳の少なく とも4基から馬具が出土していることが確認された。福岡市教育委員会のご好意により、一部の図面 を掲載させていただく。

概略を述べると、1号墳からは大形矩形立間を持つ環状鏡板付轡1が、2号墳からは軽1、鉄地金銅張の雲珠1、同巧の飾金具1が、12号墳からは素環状鏡板を伴う環状鏡板付轡1が、14号墳からは鉄地金銅張で稜のある半球状の鉢部を持った辻金具5と鞖2、鉄地金銅張の飾金具1がそれぞれ出土している。詳細は別稿に譲るが、時期的にはそれぞれTK43型式期(1号墳)、TK209型式期(2号墳)、TK209型式期(12号墳)、TK217型式期(14号墳)の年代が与えられよう。中でも12号墳から出土している轡は鏡板の断面を板状につくり、蕨手状の引手を伴う型式で、佐賀県

などにも類例が多くみられる。

#### 分析ー福岡市出土の馬具をめぐってー

以上、福岡市からは出土古墳がわからないものも含めて、約50の古墳から馬具の出土が確認された。 これらの多くは盗掘を受けたり、二次的な移動を受けた状態で出土しており、当然のことながら元々 の馬具の組合せを復元するには、困難が伴う。

しかしそれを承知で、あえて分析を試みるならば、上記の48基から出土した馬具のうち、轡をともなうのは35であり、このうち環状鏡板付轡を伴うものが20とその大半を占める。一方足を収める鐙を出した古墳は8基であり、このうち6基では環状鏡板付轡と三角錘形壷鐙の組合せが確認された。

いわゆる金銅装馬具との関連でいうと、明らかに鉄製以外の轡が伴うと考えられたのは、f字形鏡板付轡を伴った可能性のある高崎2号墳と、十字文心葉形鏡板付轡を伴ったと考えられる、かけ塚山古墳のみで、あとは環状鏡板付轡を伴うか、引手などの破片しかなく、型式が特定できなかったものばかりである。鉄地金銅張の馬具としては、前述の高崎2号墳で鐘形杏葉と鉢状雲珠辻金具が、かけ塚山古墳で鞍金具が、夫婦塚1号古墳で心葉形杏葉が、梅林古墳で鞍覆輪が、大牟田2号墳と14号墳で鉢状雲珠辻金具がそれぞれ確認されているが、それ以外はほとんどが繋に伴ういわゆる「飾金具」である。環状鏡板付轡と飾金具という組合せも8例で確認された。

福岡市域の古墳には、馬具の追葬はほとんど見られない。確認されたのは、f字形鏡板付轡に環状鏡板付轡が伴った高崎2号墳と、環状鏡板付轡が出土した柏原A2号墳の2例のみで、そのほかの古墳では、基本的に馬具1セットのみの副葬であった。

やや変わった副葬の例として、羽根戸E-8号墳から出土した鐙をあげることができる。この鐙は 須恵器の杯に6点の破片になった状態で見つかっており、当初からばらばらに砕かれて供えられた可 能性が高い。このような遺物を使用不能な状態にしてから副葬する例は刀剣を曲げて供える例などと しても確認できる。本墳の場合も同様の思考が働いている可能性が高いのではないか。なおやはり馬 具を破壊して副葬した可能性があるものとして、f字形鏡板付轡の引手と引手壷の部分だけが離れた 形で須恵器の中から出土した、同じ福岡県の番塚古墳をあげることができる。いずれも須恵器の杯を 用いているのが特徴である。

時期について考えると、5世紀代の老司古墳は別格として、大半が6世紀に入ってから副葬されたものということができる。古手の一群としてはTK47型式期の梅林古墳、MT15型式期の新立表2号墳などがあげられるだけで、それ以外はすべてTK43型式以降、中でもTK209型式期に入ってからのものが圧倒的に多い。筆者は現在福岡県全体の馬具の集成を進めているが、このような傾向は全県的なものといえる。

地域的な特性を示している馬具としては、板状の断面形を持つ素環状鏡付轡をあげることができる。福岡市内でいうと、羽根戸E-3号墳、柏原A-2号墳、佐賀県の大工田ST002、勇猛山8号墳などから出土しており、福岡県、佐賀県の馬具の一つの特徴を示すものと考えられる。これらは蕨手状の引手を伴うことが多く、鏡板のつくりも一つの轡の部分によってかなりの差が見られるなど、全体につくりが悪く、鏡板の大きさが6cm内外のものが多い。詳しくは別稿にゆずるが、このような馬具は福岡県内でも他に10例以上が確認されており、鉄鏃などと同様、馬具の地域生産が行われていたことを示す証左と考えられる。

もう一つ特徴的な馬具の一つとして、鉄製楕円影鏡板付轡をあげることができる。この種の轡は埼

玉県、奈良県、福井県、愛媛県などに見られるようにその出土地が集中する傾向がみられ、福岡県での出土は釘崎3号墳、女山7号墳、同8号墳についで、新立表2号墳で4例目を数えた。

これらのことを考えた上で、飯氏二塚古墳の馬具についてもう1度考えてみよう。飯氏二塚古墳出土の馬具には、すでに述べたようにMT15型式の年代を与えることができ、これは福岡市から出土した馬具類の中では比較的古い一群として位置づけられる。このような環状雲珠辻金具を出土した古墳としては、県内では勝浦41号墳や番塚古墳、県外では東京都亀塚古墳、茨城県三昧塚古墳、京都府物集女車塚、兵庫県西宮古墳などがある。いずれも鉄地金銅装の馬具を出土した古墳であり、鎧、轡(中でもf字形鏡板付轡)などの馬具が揃って確認された。飯氏二塚古墳の馬具が盗掘を受けているのか、それともすでに述べたように、埋葬時このような組み合わせを意識して供えられたのかという疑問は残るが、いずれにせよ、当初はこのような優品の馬具と組み合わされて用いられでた可能性が高い。

この項の執筆にあたっては、小田富士雄先生、西谷正先生をはじめ、折尾学、小畑弘己、内山敏行、下村智、杉山富雄、瀧瀬芳之、谷畑美帆、中園聡、中村享史、二宮忠司、本田光子、宮小路賀宏、柳田純孝、横田義章、吉留秀敏の諸氏からさまざまなご教示をいただいた。中でも福岡市埋蔵文化財センター及び九州歴史資料館の方々には、資料の実見にあたって直接ご迷惑をおかけした。さらに常松幹雄氏には貴重な報告書の場をお借りして、つたない文章を掲載する機会をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。今回掲載できなかった所見については、近いうちに発表の機会をつくれれば、と考えている。

#### 文 献

大庭康時・力武卓治 1985 『丸尾古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書114集 福岡市教育委員会

大庭康時・力武卓治 1990 『席田遺跡群IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書218集 福岡市教育委員会

岡安光彦 1884 「いわゆる『素環の轡』について-環状鏡板付轡の型式学的分析と編年」『日本 古代文化研究』創刊号

小田富士雄ほか 1973 『倉瀬戸古墳群』 倉瀬戸古墳群調査団

加藤良彦 1992 『草場古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第301集 福岡市教育委員会

蒲原宏行 1980 「猿獄A遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』4 佐賀県教育委員会

栗林誠治 1992 「柴又八幡神社境内古墳出土の馬具について-出土馬具の年代」『柴又八幡神社 境内古墳』 葛飾区郷土と天文の博物館

斎藤弘 1986 「古墳時代壷鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号

酒井仁夫ほか 1970 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡市拾六町所在の遺跡群第1 集 福岡県教育委員会

佐田茂ほか 1971 『大牟田15号・43号墳発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1 4集

塩屋勝利 1980 『福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書(3)・夫婦塚古墳』福岡市埋蔵文化財 調査報告書51集 福岡市教育委員会

杉戸町教育委員会 1981 『目沼8,9号墳』 埼玉県杉戸町文化財調査報告書第3集 花園町黒田古墳群調査会 1975 『黒田古墳群』

濱石哲也・菅波正人・林田憲三 1991 『梅林古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第240集 福岡市教育委員会

福岡市 1971 『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 福岡市教育委員会

福岡市 1975 『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集 福岡市教育委員会 福岡市立歴史資料館 1977 『福岡平野の歴史-緊急発掘された遺跡と遺物・原始時代〜江戸時 代』福岡市立歴史資料館図録第2集

下條信行・定森秀夫・藤尾慎一郎 1984 『福岡市早良区重留A群第1号墳』 古代学協会 瀧本正志 1991 『三苫京塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第243集 福岡市教育委員会 田崎博之・小畑弘己 1989 『広石遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第195集 福岡市教 育委員会

二宮忠司·渡辺和子 1980 『吉武塚原古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 福岡市 教育委員会

濱石哲也 1994 『山崎古墳群-第2次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第380集 福岡市 教育委員会

浜田信也・木下修 1980 『羽根戸古墳群』福岡県文化財調査報告書第57集 福岡県教育委員 会

宮井善朗 1989 『羽根戸古墳群ー西区西部公園建設に伴う調査報告書(2)』福岡市埋蔵文化財

調查報告書第198集 福岡市教育委員会

宮代栄一 1989 「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』

宮代栄一 1993 「5・6世紀における馬具の『セット』について」『九州考古学』第68号

宮代栄一 1993 「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号

山口譲治・吉留秀敏・渡辺芳郎編 1989 『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 福岡市教育委員会

柳田康雄編 1978 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第5集 福岡県教育委員会

柳田純孝ほか 1971 『福岡市和白遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集 福岡市教育 委員会

山崎龍雄・井沢洋一 1981 『福岡市西区早苗田D群10号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第67集 福岡市教育委員会

山崎純男・柳沢一男・濱石哲也編 1977 『福岡市広石遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 41集 1977 福岡市教育委員会

吉留秀敏・宮代栄一・岡田文男 1993 『タカバン塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33 5集 福岡市教育委員会

山崎純男編 1986 『福岡市柏原遺跡群 II 』福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集 福岡市教育委員会

山崎純男ほか 1978 『福岡市神松寺遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 福岡市教育 委員会

横山邦継・田中寿夫 1988 『羽根戸遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集 福岡市教育委員会

吉留秀敏 1987 『堤ケ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集 福岡市教育委員会

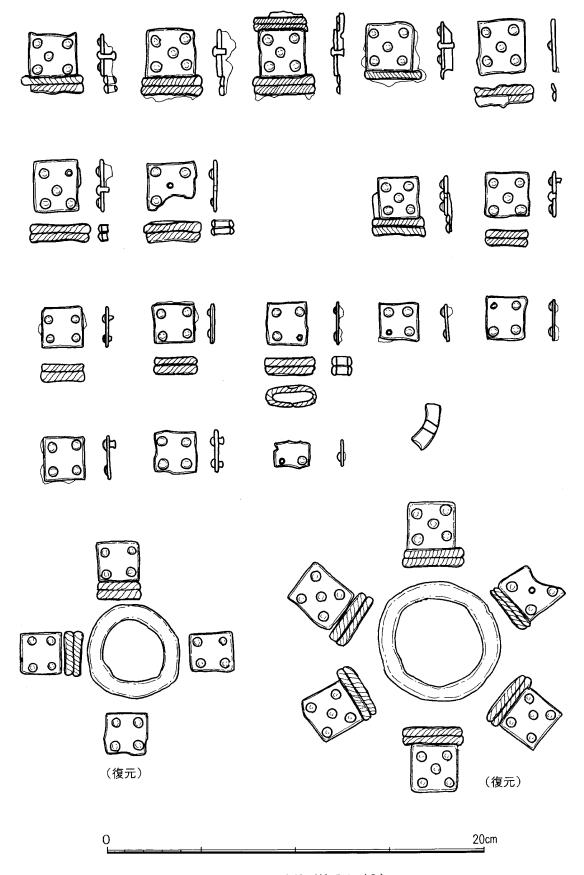


Fig. 21 飯氏二塚古墳(縮尺1/2)

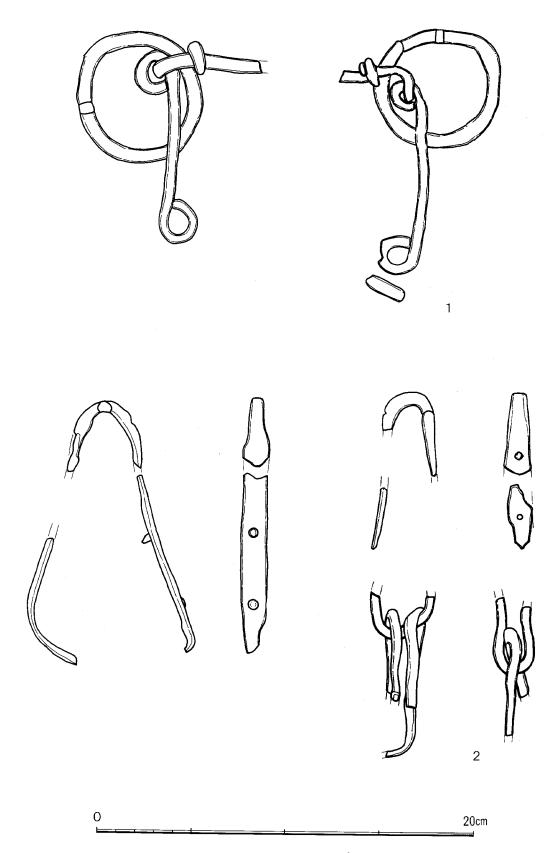


Fig. 22 1. 羽根戸E3号墳、2. 羽根戸É8号墳(縮尺1/2)

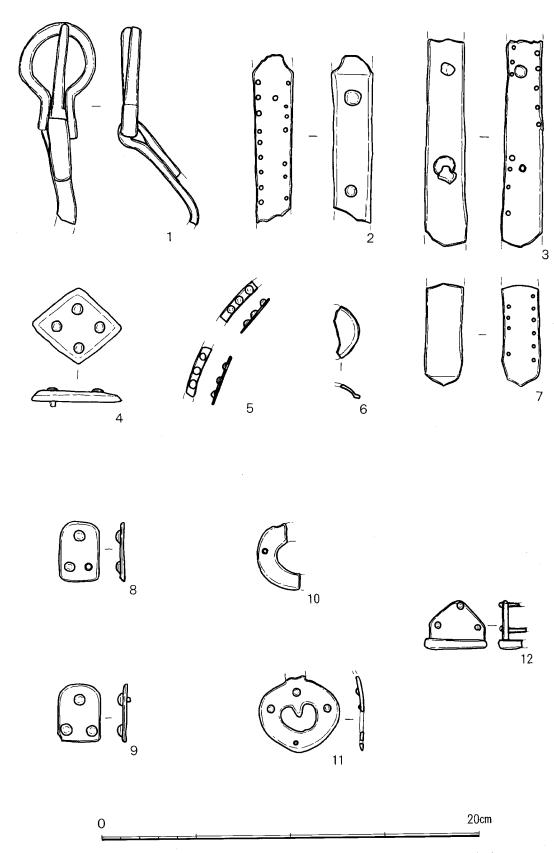


Fig. 23  $1 \sim 9$  羽根戸 E11号墳、 $10 \cdot 11 \cdot 12$  夫婦塚 1 号墳(縮尺 1 / 2)

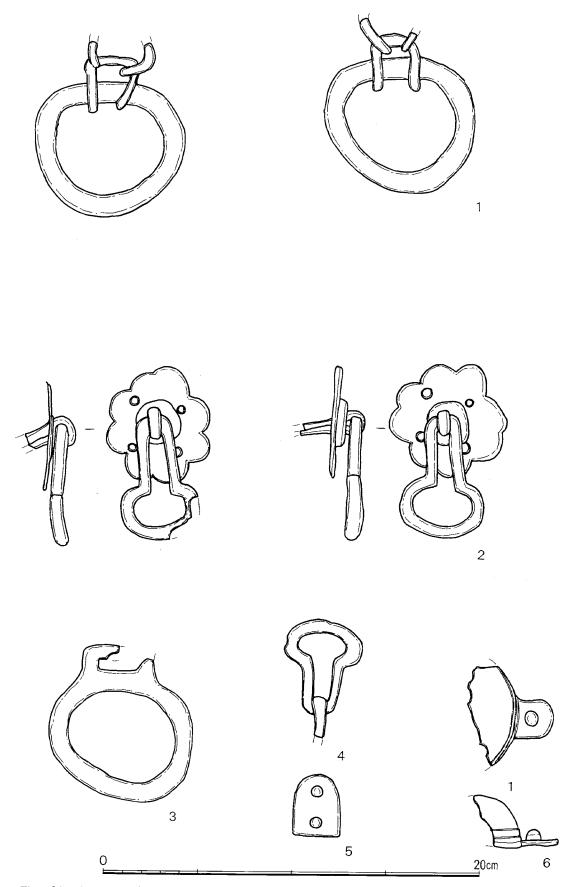


Fig. 24 1·2. 羽根戸N 8号墳、3. 大牟田1号墳、4·5·6. 大牟田2号墳(縮尺1/2)

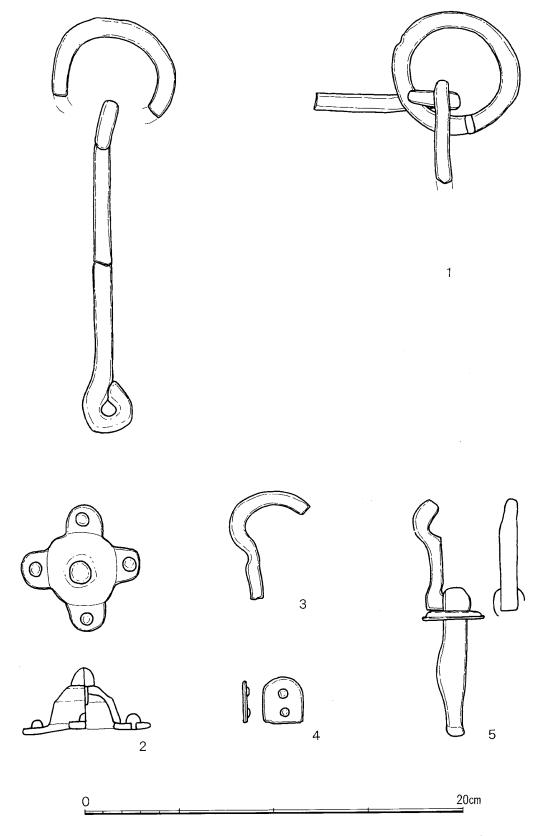


Fig. 25 1. 大牟田12号墳、2·3·4·5. 大牟田14号墳(縮尺1/2)

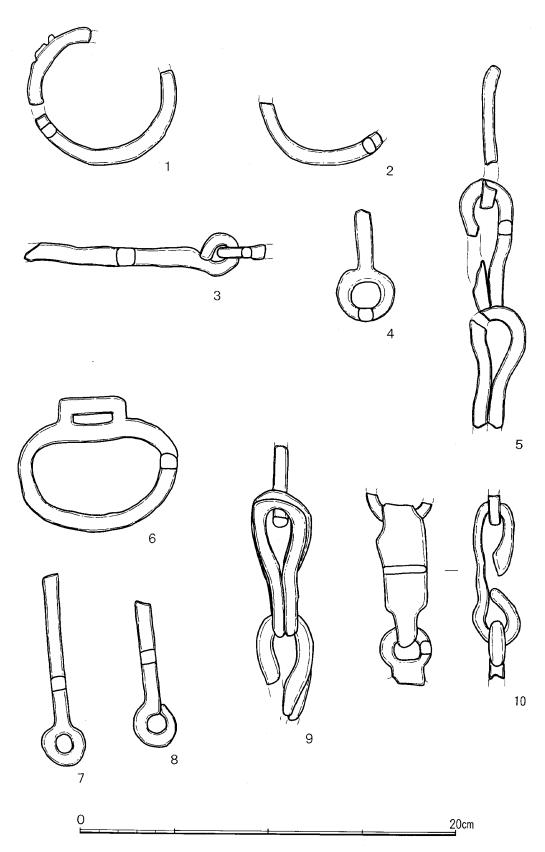


Fig. 26 1~4. 吉武塚原L-2号墳、5. L群出土古墳不明 6~9. 吉武塚原L-4号墳、10. 吉武塚原L-1号墳(縮尺1/2)

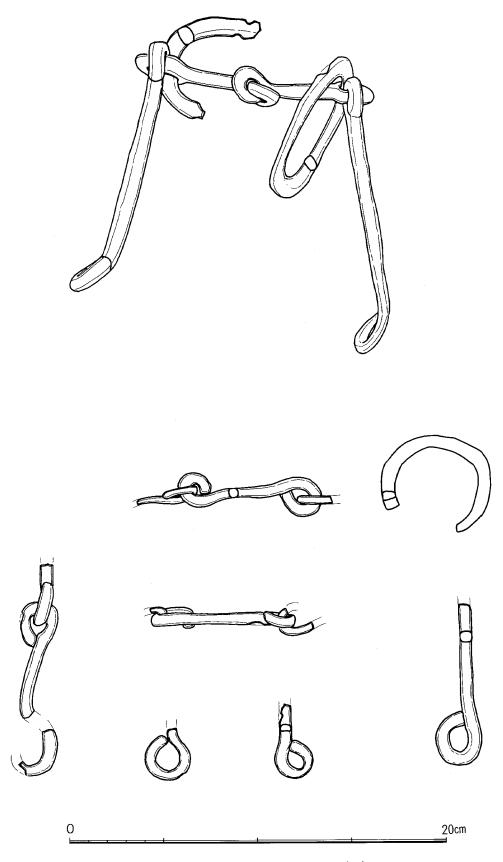


Fig. 27 柏原A 2号墳(縮尺1/2)

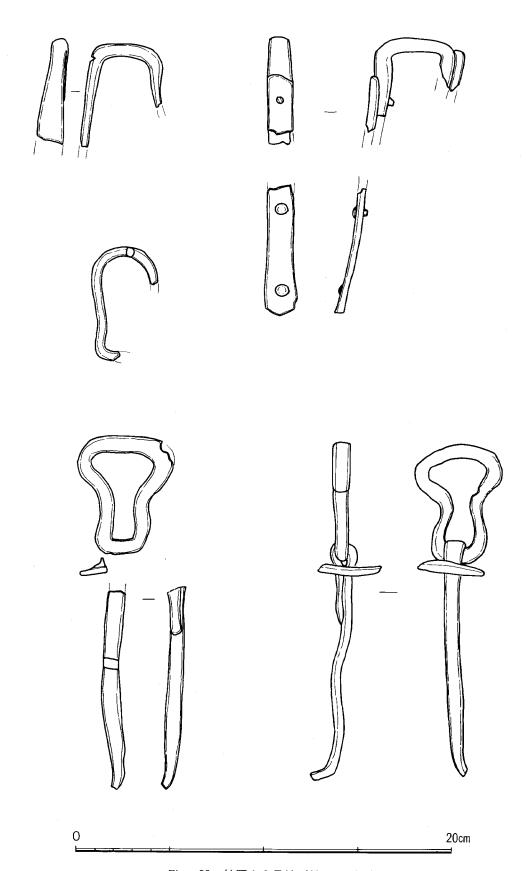
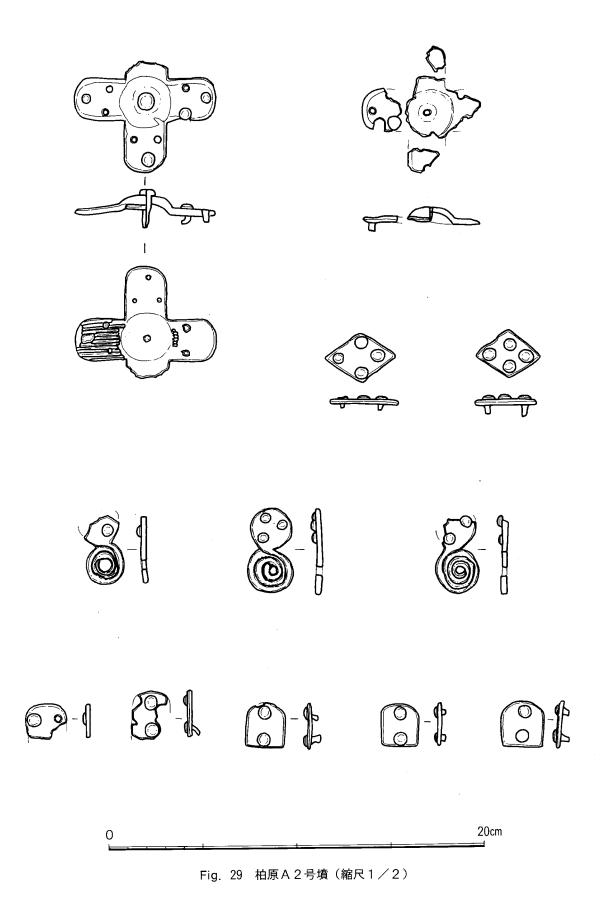


Fig. 28 柏原A 2号墳(縮尺1/2)



- 48 **-**

## 飯氏二塚古墳出土の須恵器の 蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

#### 1) はじめに

九州北部地域の5世紀代の古墳から出土する初期須恵器は大阪陶邑産のものと、地元、朝倉群産の ものが多いことがこれまでの胎土分析によって示されている。意外なのは、距離的に近い朝鮮半島産 の陶質土器が少ないことである。

胎土分析の研究はこれまで、窯跡出土須恵器を中心にして進められて来た。しかし、伝播・流通の様相をさらに詳しく検討するためには、供給先の古墳出土須恵器の胎土分析を強力に推進することが必要である。このような視点から、今回、福岡市のクエゾノ遺跡と飯氏二塚古墳から出土した初期須恵器の蛍光X線分析が行われることになった。本報告では飯氏二塚古墳出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

#### 2) 分析方法

土器試料の処置法、測定法、データ処理法はすべて、従来通りである。

#### 3) 分析結果

本研究は本来、多変量解析法を導入してデータ解析を行うのであるが、本報告ではわかり易く説明 するという点を考慮に入れ、定性的ではあるが、分布図上でデータ解析を行うことにした。

図 1にはR b - S r 分布図を示す。クエゾノ遺跡の場合と同様、試料は大きく2 群に分かれることがわかる。そして、一方は陶邑領域に、他方は牛頸領域に対応することがわかる。

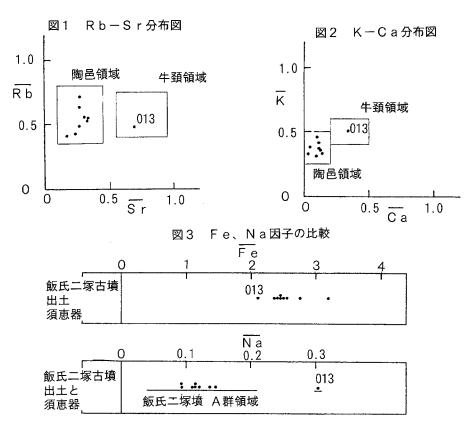
図 2 にはK-C a 分布図を示す。この図でも、No.22は牛頚領域に対応するが、残りの試料は陶邑領域に対応し、それぞれ、前者はクエゾノ遺跡のB群に、後者はA群に対応することもわかる。この結果は図 3 のN a 因子でも確かめられる。

以上の結果、013以外の8点の須恵器は陶邑産、013の1点のみが牛頸産と推定された。

クエゾノ遺跡と飯氏二塚古墳の須恵器胎土は陶邑的なものと牛頸的なものの2種類で大部分を構成するという点で、両遺跡は共通点をもつ。しかし、その内容を点検すると、クエゾノ遺跡の方に牛頸的胎土をもつものが多く、逆に、飯氏二塚古墳の方は陶邑的な胎土が多いという相異が認められる。さらに、クエゾノ遺跡の中でも、1号墳にとりわけ、牛頸的胎土をもつものが多い点が興味をひく。このことは考古学的に如何なる意味をもつのであろうか?

003	在蓋式脚付壷	0.457	0.098	2.77	0.719	0.272	0.121	Α
017	大ガメ	0.325	0.032	2.55	0.408	0.173	0.093	A
008	高坏フタ	0.320	0.134	2.47	0.534	0.329	0.114	A
014	高坏脚	0.367	0.110	2.51	0.561	0.306	0.108	A
014	高坏	0.307	0.090	2.41	0.492	0.268	0.093	A
013	高坏フタ	0.364	0.122	2.38	0.552	0.333	0.116	A
016	大ガメロ縁	0.506	0.336	2.11	0.479	0.685	0.305	В
005	器台	0.378	0.039	2.47	0.427	0.237	0.134	A
001	高坏フタ	0.415	0.110	3.20	0.642	0.272	0.144	A

Tab.2 飯氏二塚古墳分析値



付篇・クエゾノ遺跡出土須恵器の蛍光 X線分析

奈良教育大学 三辻利一

#### 1) はじめに

須恵器の産地推定は元素分析のデータを使って、遺跡出土須恵器を窯跡(生産地)へ結びつけることによって行われる。そのためには前以って、生産地側の窯跡出土須恵器の化学特性を把握しておかなければならない。こうした考え方で、生産地側の遺物の元素分析から作業ははじめられた。その結果、K、Ca、Rb、Sr因子を中心に地域差があることが見つけられた。例えば、九州北部地域でも、朝倉窯群の初期須恵器と佐賀市の神篭池窯、福岡市の新貝窯の初期須恵器とは相互識別できることがわかった。

他方、供給先の古墳から出土する須恵器の胎土にどの程度の多様性があるのかを知るのも、初期須恵器の伝播・流通を追跡する上には重要なことである。窯跡出土須恵器の分析作業がある程度進行した現在、古墳出土須恵器の胎土分析を強力に推進することが必要になって来た。

このような背景から、クエゾノ遺跡から出土した須恵器の蛍光 X 線分析を行った。本項はその結果についての報告である。

#### 2) 分析方法

須恵器片試料はすべて、表面を研磨して灰釉等の付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100 メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は測定条件を一定に整えるため、塩化ビニール製リングを枠にして、13トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成し、蛍光X線分析を行った。

蛍光 X 線分析には波長分散型の自動分析装置(理学電機製3270型機)が使用された。この装置には 48個の試料が同時に装填できる自動試料交換機が連結されている。48個の試料のうちの一つは必ず、 岩石標準試料 J G-1 である。 J G-1 は定量分析のための標準試料であるとともに、自動分析が定常状態で進行したかどうかをチェックするモニターとしての役割も併せもつ。そのため、分析値は J G-1 の各元素の蛍光 X 線強度を使って標準化された値で表示された。

データ解析には本来、多変量解析法を使用するのであるが、わかり易く説明するため、定性的ではあるが、分布図を使ってデータ解読を行った。

#### 3) 分析結果

分析値は表 1 にまとめられている。すべての分析値は J G - 1 による標準化値である。もし、%や p p m などの濃度表示が必要なときは地質調査所が報告している J G - 1 の分析値を表 1 の標準化値に乗ずればよい。J G - 1 の報告値は  $K_2$  O として 3.95%、C a O として 2.18%、F e  $_3$  O  $_4$  として 2.02%、N a  $_2$  O として 3.39% であり、R b は 180 p p m、S r は 181 p p m である。

次に、表1のデータを使い、分布図を作成した結果について説明する。

図1にはRb-Sr分布図を示す。この分布図は全国各地の領恵器の地域差を有効に示す分布図として知られる。図1には多数の大阪陶邑窯群と牛頸窯群の須恵器の分析値を包含するようにして描いた大阪陶邑領域と牛頸領域を示してある。もし、クエゾノ遺跡出土の須恵器が大阪陶邑窯群産であれば、陶邑領域に分布しなければならないし、また、もし、牛頸窯群産があれば、牛頸領域に分布しなければならない。図1をみると、P-10、12、13、14、16、17の6点が大阪陶邑領域に分布し、また、P-1、2、4、5、6、9、1507点が牛頸領域に分布することがわかる。そして、<math>P-3とP-1は陶邑領域にも、牛頸領域にも分布しないことがわかる。この結果、P-10、12、13、14、16、17の5点は陶邑産の可能性があり、P-1、2、4、5 、6 、9 、1507点は牛頸群産の可能性があることになる。そして、この可能性を確認するためには、他の因子についても、それぞれ、両領域に対応しなければならない。

図2にはK-C a 分布図を示す。この図でもP-3、11の2点を除くと、他の試料はクラスター分析をするまでもなく、A群(P-10、12、13、14、16、17)とB群(P-1、2、4、5、6、9、15)の2群に分類できることがわかる。そして、A群はK-C a 分布図でも陶邑領域に対応し、B群は牛頸領域に対応することがわかる。この結果、クエゾノ遺跡から出土した須恵器の胎土は大きくはA、B群の2群に分類され、前者は搬入品であり、後者は地元産の須恵器であることがわかる。P-3と11の須恵器の胎土はR b-S r 分布図では類似しているようにみえるが、K-C a 分布図ではかなり離れて分布しており、胎土は互いに異質のものであることがわかる。

図3には、Fe、Na 因子が比較されている。Fe 因子はA、B 群の分類には無関係であることを示している。つまり、Fe 因子は陶邑群か牛頸群かを識別することができないことを示している。これに対して、Na 因子は明らかにA 群とB 群に分かれる。そして、P-3 とP-11はNa 因子ではA 群に分類されることがわかる。しかし、K、Ca、Rb、Sr O A 因子ではA 群には帰属しない。

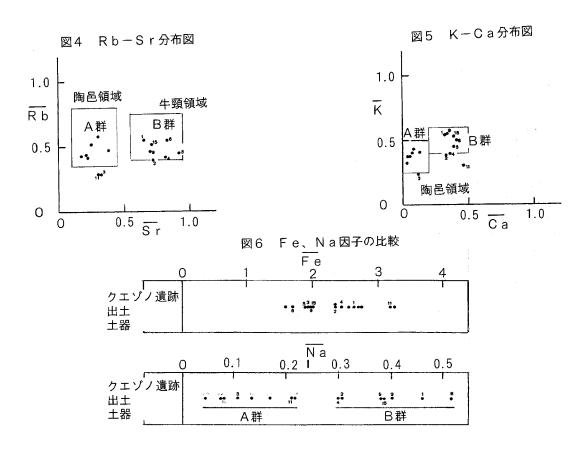
以上の結果、A群の須恵器は大阪陶邑産、B群の須恵器は牛頸窯群産の可能性が高いことが判明した。なお、これまでのところ、新しい時期のものも含めて、大阪陶邑産の須恵器胎土と類似した化学特性をもつ須恵器を生産した窯跡は九州北部地域には見つけられていない。

P-11は2号墳周濠から出土した大甕で、型式的には陶質土器の可能性があるといわれるものであるが、Ca量が多く、データ解析の結果で大阪陶邑産ではない。朝倉群産でもない。もし、陶質土器であるとすると、蓮山洞古墳群などの釜山市付近の陶質土器の胎土に類似する。

#### 4) 文献

- 1) 三辻利一、「古代土器の産地推定法」ニューサイエンス(1983)
- 2) A, Ando et al, 「1986 Values for 15 GSJ Rock Reference Samples, Igneoas Rock Series」, Geostandards Newsletter, vol.11, P159 (1987)

分析に用いた試料は下記文献に掲載されているので参照されたい。 福岡市教育委員会「クエゾノ遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第420集』(1995)



Tab. 3 クエゾノ遺跡分析値

1 a D 、3 クエノノ 夏聊 分別 恒										et stere	
	整理番号		報告書番号	K	Са	Fе	Rb	Sr	Na		分類
クエゾノ1号墳	1	ツボ	112	0.550	0.316	2.63	0.545	0.645	0.463		В
クエゾノ1号墳	2	カメ	104	0.386	0.326	2.36	0.403	0.721	0.305		В
クエゾノ1号墳	3	カメ	108	0.242	0.118	1.94	0.294	0.323	0.107		未分類
クエゾノ1号墳	4	カメ	105	0.398	0.360	2.47	0.417	0.812	0.298		В
クエゾノ1号墳	5	カメ	103	0.463	0.388	1.89	0.451	0.917	0.381		В
クエゾノ1号墳	6	ツボ	113	0.506	0.413	1.70	0.551	0.827	0.518		В
2 号墳	9	坏身	202	0.561	0.344	1.96	0.470	0.703	0.402		В
2 号墳	10	坏フタ	203	0.376	0.033	2.35	0.437	0.207	0.083		Α
2 号墳	11	大カメ	205	0.313	0.460	3.19	0.282	0.296	0.212		未分類
4 号墳	12	ツボ	411	0.439	0.083	1.59	0.581	0.299	0.168		Α
4号墳	13	ツボ	409	0.379	0.050	2.55	0.519	0.246	0.135		Α
1号土坑	14	ツボ	611	0.407	0.125	2.72	0.477	0.375	0.218		A
1 号土坑	15	坏身	608	0.538	0.392	2.00	0.522	0.708	0.386		В
1 号土坑	16	坏フタ	606	0.413	0.071	3.26	0.419	0.217	0.080		A
1号土坑	17	坏フタ	602	0.331	0.025	2.75	0.427	0.172	0.045		A

### **鉄鏃**(Fig. 30 PL. 24)

玄室床面付近の覆土から検出された。いずれも 遺存状況が悪く、先端付近および茎の基部と認め られた点について図示する。

201.は、唯一先端部近くと認められるものであ る。細身式長頸の三角鏃である。先端部と関の一 方を欠く。現存長8.8cm、鏃身部幅0.7cmから0.8cm をはかり、基部に向かって幅広くなる傾向がらか がえる。メタルが残っている。

202.203.204.は長頸鏃の基部にあたる。

205.から210.は、いずれも茎の基部にあたる。 外面に樹皮あるいは繊維質のものが遺存している。 206.のみ繊維質のものが螺旋状に巻かれているの が観察できる。断面形は、方形に近いものや不整 円形などがある。

鉄鏃および馬具の保存処理はこれからであり、 作業の過程で知見を整理したい。

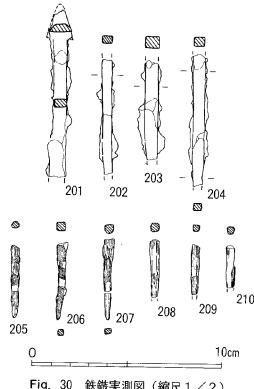


Fig. 30 鉄鏃実測図(縮尺1/2)

## 第3章 結

本書は、古墳の構造や出土遺物に関する事実報告、馬具についての資料紹介、須恵器の蛍光X線分析 から構成される。

さて本書によって、飯氏二塚古墳の全体像が初めてあきらかになった。以下に内容的に注目される いくつかの問題点を提示してまとめとしたい。

まず二塚古墳の位置する丘陵は、今宿平野から糸島平野へ移行する部分であり、高祖山西麓に分布 する古墳群のなかで系譜を整理すべきであろう。

前期の4世紀代に高祖東谷1号墳、5世紀後半に兜塚古墳(94年度現在調査中)、そして飯氏二塚古墳 と変遷をたどることができるが、4世紀の終わりから5世紀前半にかけての部分が明らかでない。二 塚の北側に試堀調査で確認された前方後円墳があるときくが、今後の調査に課せられる目標も具体化 しつつあるようである

石室の破壊は著しかったが、玄門部の仕切り石の上に長方体の石を配して短い羨道部を形成いてい たと理解できる。該期の石室の構造として特徴的であり、注目すべき所見である。開口部は主軸に対 して垂直方向をとる。

つぎに墳丘出土の須恵器について検討しよう。石室の大部分は後世の破壊により失われていたが、 石室内から土器片が全く検出されなかったことは解釈上留意すべき点である。ここでは次ぎにあげる 状況が想定される。

- 1. 石室内に副葬された須恵器はすべて掻きだされた。
- 2. 石室内に須恵器は入れられておらず、前方部と口縁部の境に置かれていた須恵器がくびれ部に転 落した。

この時期の前段階、北部九州の広い範囲では、すでに石室内に須恵器が供献されるようになる。もっとも大甕の法量は閉塞石から復元される羨道の幅よりも広いため入れることはできない。

須恵器の型式について、有蓋式高杯は、すべて長脚の一段透しでおさまっており、蓋の口径やカキ目調整などに共通する属性を指摘できる。脚端部のつくりの違いも時期差というよりも器種の多様性のなかで理解できよう。蓋の口縁端部に段を有する、突帯や蓋の稜部の張出しが明瞭かどうか、櫛描波状紋の原体の間隔の粗密などを目安として、各器種は、古相と新相に分類できよう。

古相 101、102、103、104、116、

新相 106から115、117

これらを田辺昭三氏の陶邑編年に充てると、Ⅱ期の最初の段階であるMT-15型式のなかで理解できる。北部九州においてこの段階の須恵器は、小田富士雄氏の編年のⅡ期にあたる。この段階を6世紀初頭とするか前葉と捉えるかで微妙な年代観の幅は生じるが、総じて大きな開きは認められない時期である。

今回、三辻氏による蛍光X線による胎土分析では8点の試料が、陶邑領域に対応し、大甕(116)の口縁部1点が牛頸領域に対応するとの結論が出された。有蓋式高杯は全て焼成時に歪みを受けているが、こうした器が一様に陶邑を中心とする流通経路にのせられたものか、分析結果を出発点とする検討も必要であろう(1)。

馬具では、遺存状況の悪い中、環状雲珠辻金具を構成する革金具や鉄環が確認された点は成果であった。福岡市域出土の馬具としては初期の組成である。金属製品については保存処理の過程で再度復元を試みたい。

飯氏二塚古墳の被葬者の性格を、断片的な副葬遺物だけで推し量ることは難しい。だが石室構造や 馬具類の解釈によっては、半島との関連を求めざるを得まい。須恵器の型式は、およそ6世紀初めに 限定でき、造営から埋葬までの期間も極めて限られていたようである。この頃、筑紫国造家と大和朝 廷との緊張関係は、継体天皇の二十一年(527)に表出する。『磐井の乱』である。二塚古墳の被葬 者がどのような役割をになったにせよ、こうした激動の時期を生き抜いた人物に違いあるまい。

ここ数年実施されてきた今宿平野に面した前方後円墳の調査は、地域的な課題としては、首長墓の変遷を明らかにするという目的があった。また同時に初期横穴式石室など韓半島を含めた文化の導入に視点を向けた、アプローチも強調されてきた。今回の事実報告が、さまざまな問題を提起し、内外の文化交流に役立つことを期待したい。

また身近な課題としては、時期の近い前方後円墳である今宿大塚古墳との比較研究があげられる。 盾形の周濠が回り、埴輪をもつなど、規模、内容ともに飯氏二塚古墳を凌駕するが、出土した須恵器 は同型式という(2)。墳丘形態だけをとると、平面形態の比率も近く、飯氏二塚古墳との対比をすす めてみたい。また隣接する自治体との積極的な情報交換ものぞまれる。さいごになったが関係者各位 のご理解とご協力に重ねて感謝申し上げるとともに、なお一層のご鞭撻をお願いして結びとする。

註

- 1. 中村 勝「筑紫における有蓋式脚付壷」『古文化談叢』第33集、九州古文化研究会1994年。文中氏は、型式を検討したうえで、未確認の古窯址の存在を示唆している。
- 2. 柳沢一男「今宿大塚」『福岡平野の歴史 緊急発掘された遺跡と遺物』、福岡市立歴史資料館、1977年。 前方後円 墳集成によれば、外表遺物として須恵器(MT-15)・陶質土器とあるが、遺物は埴輪3点の図版以外公表されていない。 仮収蔵のコンテナは、約250箱、折をみて須恵器だけでも再捜索したい。

## Summary

We have excavated particular ruins for the purpose of recognizing significance of them. Up to now some tomb mounds have been investigated. During 1992 and 1993 campaign, we carried out the survey of Iiji-Futatuka mounded tomb.

This burial mound is located in the plain that spreads over west side of Fukuoka City. The distribution of more than 12 keyhole-shaped mounded tombs have been known there, and Futatuka is one of them. They give us significant information about transition of local kingdom in the Kofun period.

The Mound and Burial Facilities

The survey was begun in Feburuary 1993, and at first we made offset planing. After it, we dug up 14 trial trenchs by necessity. As a result of the survey, we found some paving stones on the slopes and a stone chamber. There was no Haniwa (unglazed earthenware). We will explain its outline as follows.

The length of burial mound is 48m, and the diameter of a circular mound is 28m, and the square-plan mound is 23m long and 34.5m wide. The direction of axis is about west-east. Some part of the mound was damaged by cultivation or earthen pits.

The altitude of the highest was 34m, and the height of the mound is 5m, and most of it was artificially heaped up. The process of heaping can be devided into 3 stages. First, the mound was fundamentally rammed and the stratum looked like small stripe. Secondarily rammed with blackish or yellowish soil one after another, finally the mound was finished with red-colored soil. In contrast with paving stones, the mound could be seen as the huge monument. It seemed to appeal visually to the people.

Though most of the upper part of the chamber was damaged, we could find the remains of it. It was a corridor-style stone chamber, being made of granite. The entrance of the chamber opens to the south, and an eplliptic stone was laid in front of it. By the observation of the order of stones, the chamber was restored as a symmetrically built stone chamber entering in the middle of one end. It measures 2.3m at the entrance and back wall, and 3.5m long. The lined stones partition the main burial chamber and the passageway.

#### Remains

In the chamber there was no pottery, we just found the pieces of horse trappings, strap unions, round glass beads and iron arrowheads. Especially strap unions with a decorative metal found in Fukuoka region can be regarded as a comparatively early type.

Most of the pottery, Sue ware were found at the narrow waist of a key-hole shaped mound. The shapes of potteries are big pots whose height is more than 1m, a wine server, pedestaled bowls with fitted covers, a footed jar with fitted cover. And the types of potteries correspond to the type, MT-15, based on the pottery chronology from the Osaka Suemura kiln site group. They can be dated to the early 6th century A.D.

We got 9 samples of Sue wares investigated by Prof. Mituji. According to X-ray flouorscent analysis, 8 of their data correspond to the range of Suemura kiln sites, and 1 of them cor-

responds to that of Ushikubi kiln sites in Fukuoka. If these results show the producing center, many Sue wares were brought from Kinki district. From an archaeological point of view, as pedestaled bowls were twisted, some questions leave room for discussion.

Discussion

Iiji Futatuka can be dated to the early 6th century A.D.At this age funeral rites using pottery within the burial chamber became widespread. In this survey, although most of the main chamber was destroied, no piece of pottery was found. I wonder why potteries were originally placed within the chamber.

And we should pay attention to the structure of stone chamber. Because the style of it is very characteristic, we have never known examples about it.

Up to now, in Fukuoka region, the material concerning about the early 6th century was comparatively few in number. As the tention between Yamato dynasty and North Kyusyu kingdom was increasing, "the rebellion Iwai" broke out in the Chikushi district, ancient Fukuoka district. The buried person in Iiji Futatuka mounded tomb was thought to be alive at the same period.

The transition of keyhole-shaped mounded tombs implies the growth of power of the local rules. It is not much to say that they are witnesses of Kofun period. So we make much of every articles excavated there. For the present, we are going to compare with the neighbouring mounded tombs.

At the end of this report, we greatly appreciate advices and aids by many people.

KEYWORDS: the Kofun period. keyhole-shaped mounded tombs, the early 6th century, North Kyushu, a corridor-style stone chamber, horse trappings, strap unions, the pottery, Sue ware

(M.T)

# 図版



後円部近景(西より)



前方部近景(西より)

## PL. 2



前方部近景 (東より)



前方部近景(北東より)



玄 室 (羨道部上面より)

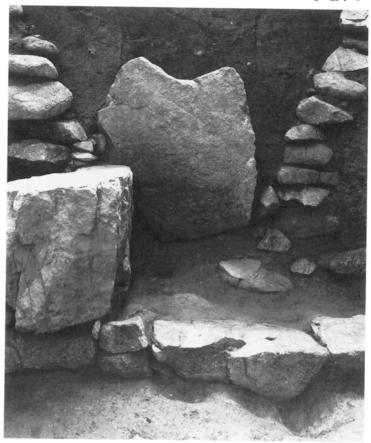
## PL. 4



玄 室 (東より)



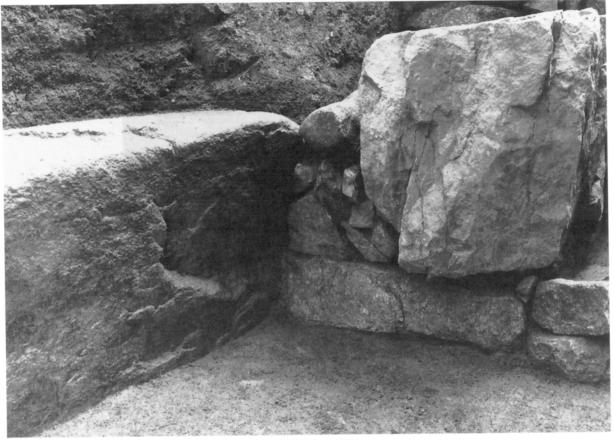
玄 室(西より)



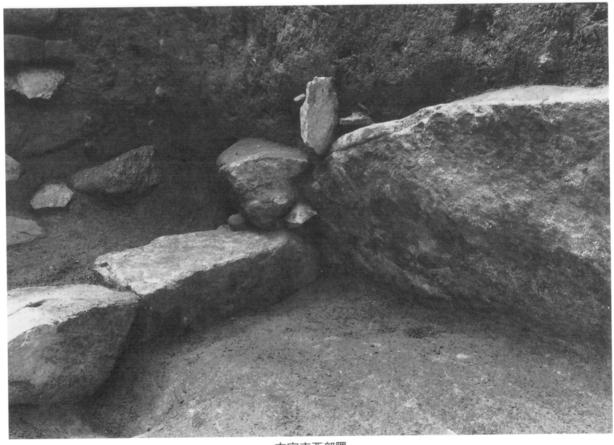
閉塞石(玄室より)



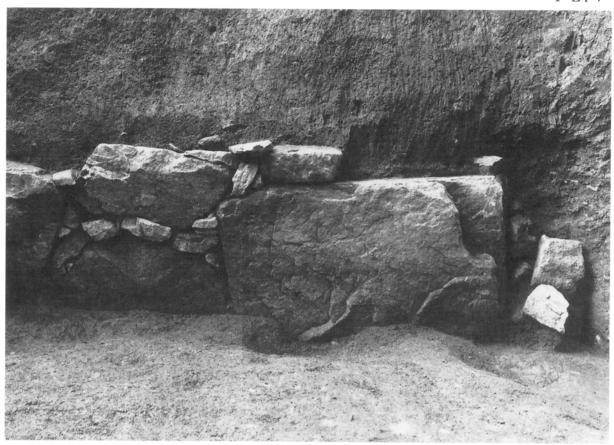
玄門部 (玄室より)



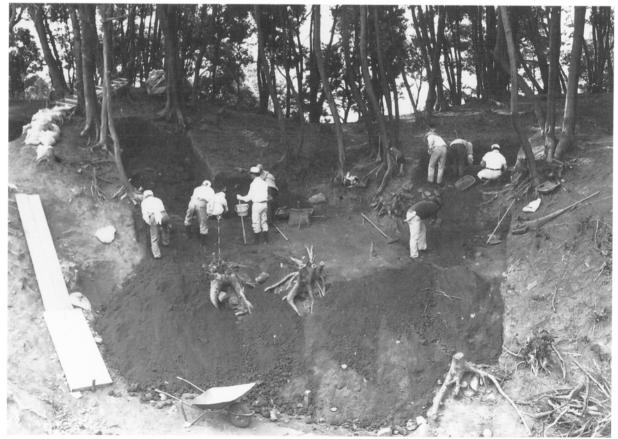
玄室南東部隅



玄室南西部隅



玄室西側壁



南側くびれ部 (第1トレンチ) の掘り下げ (南より)



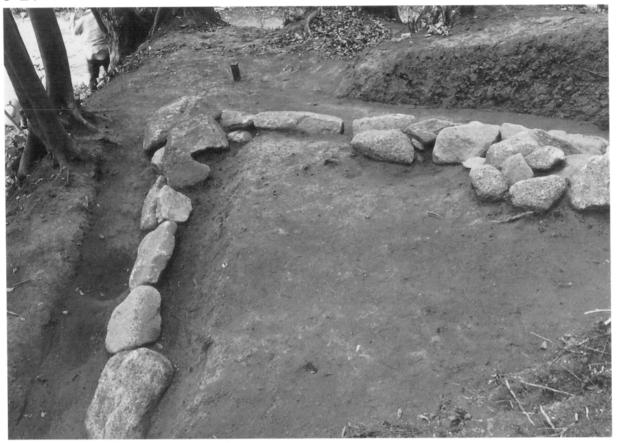
南側くびれ部(第1トレンチ)葺石検出状況(東より)



南側くびれ部 (第1トレンチ) 葺石検出状況 (南より)



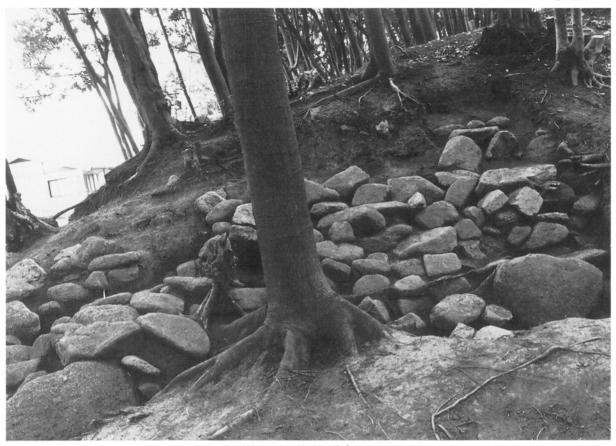
南側くびれ部 (第1トレンチ) 葺石近景 (南より)



前方部北東隅 (第9トレンチ) 葺石検出状況 (西より)



前方部北東隅 (第9トレンチ) 葺石検出状況 (南より)



前方部南西隅 (第6トレンチ) 葺石検出状況 (東より)



前方部南西隅 (第6トレンチ) 葺石検出状況 (西より)



前方部中央部 (第7トレンチ) 葺石検出状況 (東より)



北側くびれ部(第2・4トレンチ)葺石検出状況(北より)



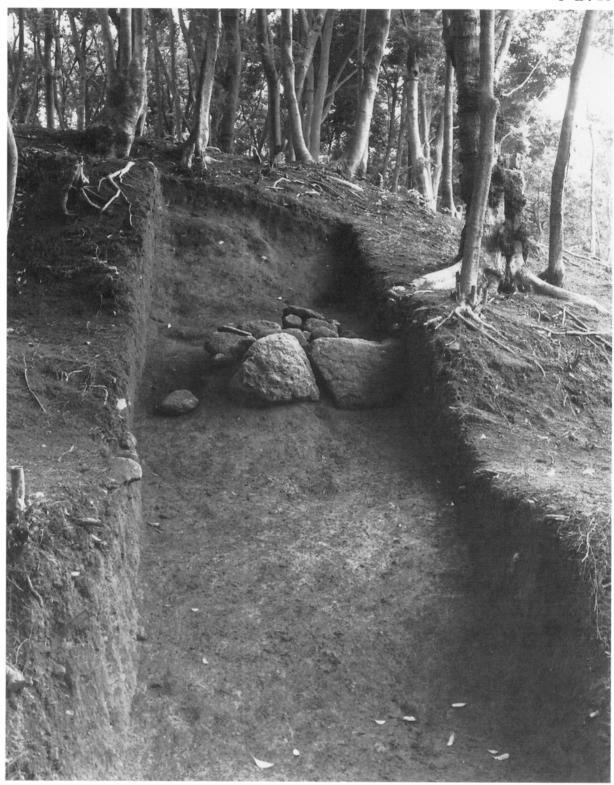
北側くびれ部 (第2・4トレンチ) 葺石検出状況 (南より)



後円部北側(第10トレンチ)葺石検出状況(北より)



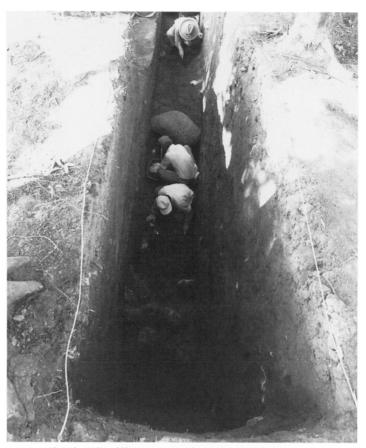
後円部南西側(第14トレンチ)葺石検出状況(西より)



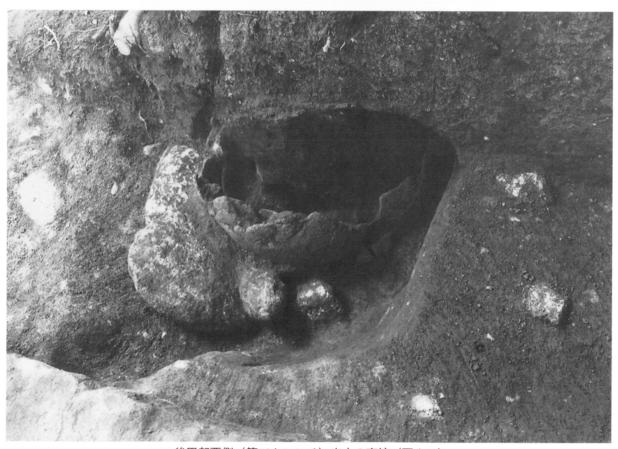
後円部西側(第13トレンチ)葺石検出状況(西より)



後円部西側(第11トレンチ)葺石検出状況(西より)



後円部西側(第12トレンチ)の掘り下げ(東より)



後円部西側(第12トレンチ)出土の甕棺(西より)



後円部玄室奥(第15トレンチ)の土層(南より)



前方部南奥壁 (第5トレンチ) の土層 (南より)



後円部西(第12トレンチ)の土層剝ぎ取り作業





南側くびれ部(第1トレンチ)有蓋式脚付壷出土状況(南より)



飯氏二塚古墳出土須恵器





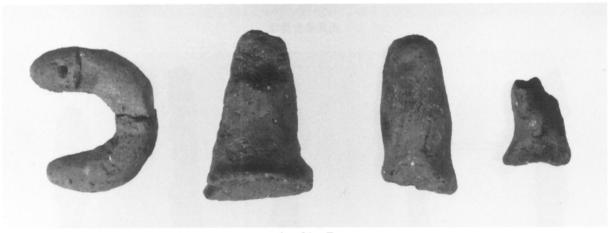
▲ 踉

◀ 有蓋式脚付壷

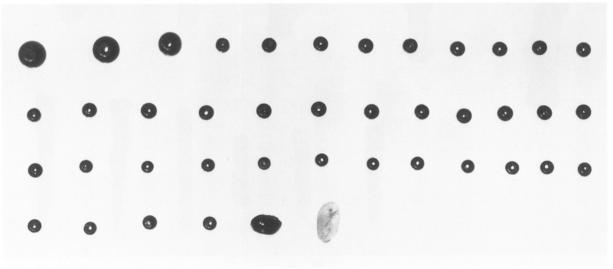




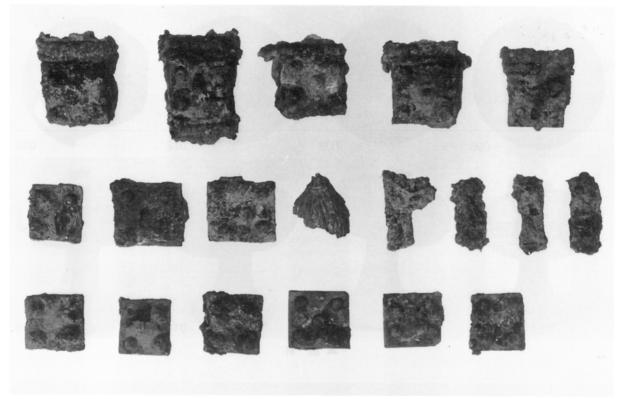
▲ 高 杯



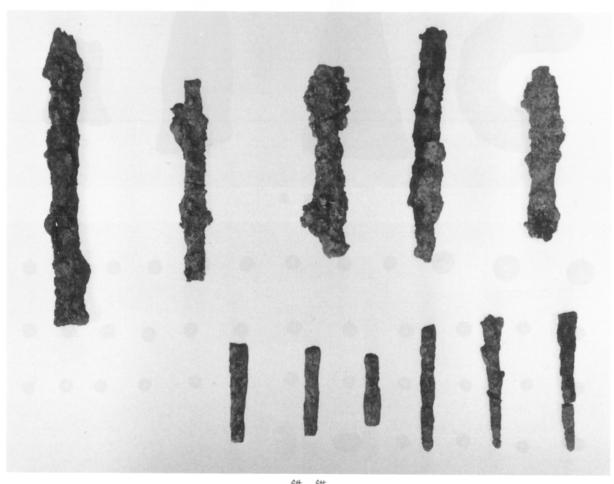
土 製 品



ガラス玉類



馬具革金具類



鉄 鏃

## 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第435集 飯氏二塚古墳 1995年3月31日

編集発行:福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号 埋蔵文化財課

₹810☎092-711-4667

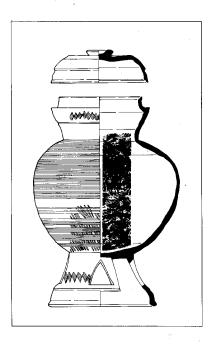
印刷所:株式会社博多印刷

福岡市博多区須崎町8-5

**2**281-0041

## IIJI FUTATSUKA KOFUN

Excavation Report of A Keyhole-shaped Mounded Tomb in Fukuoka City



March 1995

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

Japan